湖月抄

まきはしら

36

828
.M855

Freer Gallery of Art
Washington, D. C.

7152

真木柱 并九 細 巻名以哥号之。河 今はとて宿かれ
ぬとも馴きつるまきのはしらは我をわするな。細 源三十
七の十月より三十八の秋までの事あり。但去年十一月より
おもひそめてさまへにざさまふとあれども十一月までの事あり
つ 孟 同義 異本 彼一説の義によりていはゞ源氏卅六歳の十
月より卅七歳の十一月までのことをしるしてさて又
秋の夕のさびしさをかゝねばさもあらば一年をとくる卅八
歳の秋までといふべし。赤曇乃并之。孟 此巻のはじめは
まづこの雑黒の室に放ちふるまひしより

内にきこしめさん 細 玉鬘頭
思のほかなる事なるを
とかく兼日にくるしく
みかどより尚侍にめ
されし。まだ入内あらねど
さるを髭黒にうつりたまへば
御門のおぼしめさん所もおはしまさ
んとはゞかりてかくいへり
とかくさとそしめて給ひ
たぐひなくおもふ御事
此人をは思ひやりたまへ
上下界
あらんかぎりは 細 源の御事也。
世界へひろくもらさじと
しばしの事と源のおもへる
ぶらとく 細 大将の心也。
おぼつかなく思ふ心もあら
の内なる事をしのびたる
もりかけ給へるさまらし
さうまうし 細 大将の心也。
此人を自然ある文にも
こゞられてことをひ
おふし

内にきこしめさんこともかしこし。しばし 可畏と云ことそれあり
ひとにあまねくもらさじといさめきこえ
給へど。さしもえつゝみ給はず。ほどふ おひげくろの給ひ
れど。いさゝかうちとけたるけしきもな おむかうの給ひ
く。おもはずにうきすくせなりけりと。おもひ 雑黒の心也
いりたまへるさまのたゆみなきを。いみじう
つらしとおもへど。おぼろけならぬちぎりの
ほどあはれにうれしくおもふ。みるまゝにめでたく
おもふさまなる御かたちありさまを。よそのものに
みはてゝやみなましよとおもふだに。むね
つぶれて。いし山の仏をも。弁のおもとをも 弁の女ばう
ならべていたゞかまほしくおもへど

石山の仏とても　孟嫫の弁を観音と同くきこゆるとふとく　花　白拍子天狗の石山乃
観音よ申ろくのふすといのり上てまつるべし

ものぐるしげなることぞも
師　河海よまへさがつて…
づてよもかけし人ゝの
ことし　呪語よえてぞうつ
ものぐるしげなるとなひけり
是の寺の山ゐんくこゆるさべ
しらずのとなふれども
河海　多日本紀　数多日申ろ
らへものけしくてのうへ
ととって
こゝろあさき人のさめよそ
寺のげんも　師　河海よハ舞
いのうつきよ於して白拍子
の依ゟぶらるゝすくまあ
人ゐらときわあさき人と
そうくくろるくハと正直
とそ仏神のうけのふへき
ことさく　細　河海よ日ん浅さ

細　白拍子と今くも云ひうぶられ子女と物くるひとて
女房のかくれのしと物ぐるひしてこれ
だえまじらひそこりねよそらげよそこ
弁のおりしかたもと　其序之
らんぐるしげなるとゝもくまらうくよさこ
しんどころあさき人のさめぞ寺のげ
仏の語也も新れ之事さ　細　此ものゝ字ハ深く申ろくて寺さ
んもあらわれりん　ゆくとこころゆりても
までハ乃きさし
あしうゆがをとじいふのひるさことそ雅
細　実文字どハ由かきて
もしくゆりしそあさまくるこそうれど
ひきうへしゆうさぬうらへ代をとんとど人乃
さ然んいとおしう　あいなしよ思してぞし
細　天狗の秘説方し　申ろてとも
さいとよるくまてうつさすいろしうと
こうど房よもさしなくへとゝひひいるゝ

人ゝハ舞ふとよるくるぶをおりどれも面白し　又の義ハひけぐろの寺の山の方
ゆのすまさ海く行りのひしうども其志ゟもすりらしく　ぞ　れハ物のけの云う
行さへし　今此申ろくへのうすを行りまつる程は　よく如語すゝるる事是ハ申ろくうう
ゐ浅さ人ゐらかろよ利生もゐえやうなりし　此時ハ人浅さ人とハ申ろくうう
ゆゑり此段こ然り　義白ん浅さ人も弁の御りとがるのく此人の　郷ゟゐろ石ひさ
が高名よそ　石山の利生をあらうそしうると云ゑ　師　申ろくノころ　あさき人ととゑ
ハ咒の段之
ぞらさいしとゆうす　細　天狗の出入の義式之　今くのるすとも深のように法しまさ之
深乃世俗勝之

ぎすまくとうがくしくかとこうらとけうさ
源氏の君よる也之
細　いまさ寺の宗まうまうせ何之
まを語そんよそしこうよまらうりてしうくし
をとふあじさひこのよの語るうりがいと
実ハ申ろくてよ執心の下心あまりと
ゆかさよつこしつけおそすどんのどうりよおぞ
らりたうさ海めくくどとうすくいづさとふと
ひとのそをり根るうりへくどりてあうしまぐ
内大臣之
とぞ云てくしふゆのふうくゆくぐハ中ゟくぬや
とりゆりくこよこ海りあうりしろくへるまさ

文字ぐハ　細　内大臣の仮ん
まハ語んなきさ之仕よ
てとハ天狗の色づきさまふ
ますをハて物をまきふひのすきさ

心ざしはありながら　細 涯分の縁にはなさんと思へども、女御をさしおきて二方はいかゞと也

かうしのび給ふ　源氏より世間をはゞかりてかくしのび給ふ也。内府の心はいかゞあらん。式部卿宮の　細 源氏の心はなけれど宮々も実はすゑさだめられしを又世上の[illegible]めりけり

人のなまほのすいたる宮仕へに出立て、くるしげにやあらんとぞうしろめたくありし。心ざしはありながら、女御かくてものし給ふをおきて、いかゞもてなさましなど忍びての給ひけり。げにみかどときこゆれど、人に思しおとし、はかなきほどに見え奉りて、ものものしくももてなし給はずは、あはつけきやうにもあべかりけり。三日の夜の御せうそこども聞えかはし給ひける気色をつたへきゝ給ひてなん、この大臣の君の御心をあはれにかたじけなくありがたしとは思ひきこえ給ひける。

孟 すゑつくしきさまへつかひ給ひける宮仕也　むすめを衰ひ内府の心とおれども　内府の内々のおほせ也　孟 こゝにては人の女御也　帝の御事也　孟 源氏の[illegible]をも評し　細 婚姻の三日めあたり餅などの儀式也　源氏をとりて　内大臣の御心をさして也

かうしのびの給ふ　孟 ひげ黒の玉鬘事　宮仕への[illegible]は内へまゐらんするなど　事也

宮づかへなど　細 こゝにては宮つかへより尚侍には参りすへしなり　玉鬘事　尚侍なれば也。きはめて参内あれ〳〵しと也。師 宮仕はれば帝の御心のかゝらせ給はんはこそ参内もあらん、ひ給ふまじきと也。霜月になりぬ　細 神事の月也。内侍所のことは五節以下多くて事を云なるべし。師 十一月朔日一日法忌火御飯　十日神祇官始供御贖物を

かう忍び給ふ御中らひの事なれど、おのづから人のをかしき事にかたりつたへつゝ、つぎつぎきゝもらしつゝ、ありがたき世がたりにぞさゝめきける。内にもきこしめしてけり。くちをしう、すくせことなりける人なれど、さおぼしゝほいもあるを、宮仕などかけかけしきすぢならばこそは、思ひたえ給はめなどのたまはせけり。霜月になりぬ。神わざなどしげく、内侍所にも事おほかる比にて、女官ども内侍ども参りつゝ、いまめかしう人さはがしきに、大将殿ひるもいとかくろへたるさまにもてなして、

細 天聴にも達する也　孟 玉鬘をもとよりおぼしかけさせ給ふ事也　孟 帝の御詞　髭黒大将の事也　玉かづらの里亭へかよふ也　左近衛府也　ひげ黒の事

外従社の各のことば、河海ニ委
内侍司ニハ女官ども内侍など
女嬬 此四等の官也
兵部卿のみこ
づかうにんかなしくへ大将 細 是を云り
の中宮の見奉くされ
ば方くまに惜く思ひま
らし
わびしくおこの事り 孟
う 抄 実にしらぬ 細説
[illegible]引ぬ人をとめくくなけ
思のさ色し

こゝちなどすれど。いとしのびつゝさるかんの君 先 内侍司の中に尚侍 典侍 掌侍 おぼろ月夜の尚侍の事也
いかゞしくやさしげなるはまいりていとゞうに 抄 嘗我宮の事也 孟 まいりそこ
かしこきかげにて。兵部卿の御わた。いりうとの中宮 式部卿宮也
れ流こしをさへ。びともくへよ忘るかたく。
よりつきのかゝりそかれど。さこぐ御[illegible] 抄 兵部卿の事
う限りにて色。今いとひたすら[illegible]
ねびまさりゆく人のとし[illegible]
じれうなるゆかりなくて[illegible]
あくがるゝゆきそておもしろきあはこの
おもう。霜月のついたちころのびまいらせ
つとめてえんにゆくへしらず[illegible]

細 大将に對して
ていかならむ事を
ゆくてかくして。残姓あ
しるき事をつくりま
あり
御心そすらぬさ御
かくのかすくぞ大将 細 云
に逢なさるにびんを
源ハいくりくそり給
すじきさそ御しむ
ひまふとし 奥のきふ
をおもくのかけすぎ
分はしとおりそ 源
のひとつるまかるに
御こゝろのかはりそくんそ
異 者覚よるなりて
みかきんとこけりしき
とし
後もいとおもしろう
細 源と人の類しも
今けぢれざるのある
は道かへきしこと

まさりて。女はいつらきよ。けぢめさてそれそ
しらぬ事をすてゝ。いそいそ[illegible]
むつまじくれ。心ありてあらぬさ御心に
かれど。かくもの御かたそんとし。女の
まんのこゝろかち。[illegible]しくたすれ
さしきをとあはすべくそうし。[illegible]
のみおりかたよりのところつきさる事
色絶ぞ。御もいとおしうんべきは
びろすぢをのぞさふくわかくつまで
こゝろなくくらうけよわびけるこ
とのまでうして。前よりのゝをそ
しかく。紫の上みも思ひうなひ

うちつけよ 細 おもひつけるなるに源のくせにこそ懸とまもひくるこそ
いまさらに人のくぜ
孟 源のくせのるゝと常
よんよりけていひあるゝ。
心のくせとなりたることさ
らよ人のとくえ 源の説
るうそのあやさし 師人の
人のくせとくへんぬ女の
し源氏といふやうなるぐ
しさぬ々女と思ふ無一し
あひて人の心ろくせ玉れ
ぐんとも又よ又好色の心の
おこりやせんとてもてて
しこゝあらじ くとも
けきそ 飛 ゆよの説さ
いふ也あひしよ[illegible]
そうしされるしさ[illegible]

しよりごとく 給。いまさらさらによ人のこゝろ
ぐせありてとあがりしるゝぐりのくるし
うあやきし時。さそりやとあわり給
ひしこゝるに、いるくと笑しそし
ねのやせぬひろつらこつらりあ。女ゑ
おやしうえすやましけよのこゝりてるへ給
てすくようなるかりりあてもちられなる
と。くりとりまされど。すこしゝちさあくり
あそ。ゑわりにみえさくれてしおこ一本。多も
見きことよまりすうしけくもてさ給ゆりて
ありまひてたりとのゝとじことるしこと

もくまろう 細 只指大
ねよるうかひて。今源よ
ひろでも別のまれよを
申すこ

まそれこえるまり 細 源
のくうちり。殺物よしくく
もえそへきを物とよしく
おりさらて 孟 源云へ。
くそえへねともとよい。
源のくまみとるゝ人の為よ
るもくさて思ひそうり
しとく 細 二三句 源氏笑

もくまる家のみつゐの人によるひて
まして人のさまとも聞けりひとはゝ給と云
あと給よを。おもひのかゝなる身の定ぞあろ
すぐろうしきふも潤ぞらかれぬやうぐ
ら向やうあう流物語よありて。いひ
けうそくよまりうしてこそ。すうしの定記
てゆかしさふ。いとおかしげよおかりやを給
つるさ海の。こゝまかりしうらう為い懐姫の法
ひまつるようけて もじよそよこえる所を
あまりかたる心のすさひぞりしとくらあ。
おりさらてくえへゝどもとをそゝりげひ
とのをとゝそさきちぎうくさりし。と。云ひ乃や

するすさことゝ云り。しかも死
て川をわたる時のおとこハお
ひもしとし。渡り河ハ三途
川といへど、ここにてハ只河
といへる一説也
みつせ川　孟 女の思ふ所を云
思川とおもひかけて三途
川ともいへば、ここは義有
まさあれど只その身に
渡るべく、かゝるの時
出来るこゝろさきに消る
とく又ハ定まる死の
ありがたきさきにきえ
さりとて文字にてハよそう
ぬさきにといへるにてあり
とけつゝ河三途川之義
紫川ともそう。十王経に
見えたり。之を八河水渥
日本紀 水尾 万葉 澪
細 涙の淵しばしも三途河
ハ必渡るべし 孟 涙淵之
ひとり物を三途をこそ
ようしてそれまんとハかき

なりやうそてそれゆゑに給はむひかる
しうありつゝわたりかはもしりなくして
みつせ川わたらぬさきにいかでなほ
どのみをのあわときえなん。心をさなの御き
えどころや。さてもかのせはよぎみちなかなる
なちと御手のさきばかりハひきたすけ
きこえてんやとほゝゑみ給ひて。まめや
かには思しる事もあらんかし。世に
なきしれじれしさも。又うしろやすさ
もこのよにたぐひなきほどを。さりとも
となんたのもしきときこえ給ふを。いと
わりなうきゝぐるしと思したれば。いと

をがほしくおもひしく
れ子のさればかりハ　細 丈夫のかゝるひとりめぐらん三途川を引渡すべし。望みの
しとても丈夫のかゝるひとを云　みせよりおもひ渡りて　猶のおもハあまたこともく　琴の
なまでろじきそも云へき　河 源氏なかくしと来ることをける死 寂初嫁合の男
此川を引渡すべく。孟 源と知と契るのありしといふ河海の説なきに遠るくき死にて実るき
ともかれく　さきく琴を枕として源外渡るとなりしるとハ実るかるきてくさに
よりそし所のさきづかり引まをはんとをうくてまへるくらりいへるひ給ふや
まめやかよ　細 思ひかゝるとを思ひ知るかかるのあくさとるらんずくのあすく
世よるきさはれぐし　孟 愚痴之。源の我身を云ふて。三 琴を枕として心を述り給へぬこ
さるのそ(?)よう給ふまて。源の心を今思ひ知るかゝいべしとこと
そひそめ　眠 うらんまかかせ
人の心之　細 源の心ハ先夫
仕よ出して後よいひとを
くくりともいへしとく　細 文かくく之。
二条の地しく
京図よ二条の地ことと

源のかし
おしうてのたまひまぎらはしつ
細 源の判のすよえるとあすく
の給はすることなんいとおしきと。猶わ
まかりまかへとく
さ御よ気しきをしてまうらんとの
思の我物とていへと
つかうじをそくハ。なやくの御かうしらひし
きげるめく。これありといひそめ吹えてくハ
よふさ給ふめれど。二条の地どハそら
まことすと御ほえとくく
ゆさ給ふれば。うらやましくるんるどこ

細 暫時よしばし 孟
細 大将のかす之 孟 御前
大将と契る
細 源の詞と
孟 実くうちやすくるうしく
細 三途川のわたり之渡守人をもきて渡す
孟 源 細説
物の神之

わかうらうにでん大臣の
父大臣のゆるしおかまつり
の父大臣ハ二条太政大臣の
御子られどり二条の大臣
と情ある兵の義よ
なださうれ

りこに 弄 大ねのゆく先
つくのまうものえんろを
源氏のかとえおもくせ
と御かもとしおちめくり
ともよく御かさし此比
なされぬ源の心中を

その二つには 細 青回
らびそくに大ねの事へ
源を(?)べさん(?)あれども
とものひまり給つらく 孟
此比に大ねのさくへれ
さへとて
くまひくろくまよ 弄 源氏

うはゆそて給。 細 あらくくらくあし
おもくれみもくらうしくさし給

こしかかれど。 孟 あらし
しこく御にうまかれてまりる。

源の心を
いとりくまかしうこ御の心ぐすりれど。
おもくの思ひ居しくう(?)ひさんと

源の心
ゆがまさ御かもえずれ給ぞくせある人
細 心ついをそぐ

さやうれ(?)こころづひとしぞし給。
孟 源の心

こまけうり御ぢんことも 孟
思へ給ひまかせ
しゆの給ぞまさ 孟 きいなく見へ系り給
南信の頼かたかし

りんことゝやもそりぬこゝよろね思ひとと。

そのつぎよやぎてまうぐさせ給ん のけ

心つきあそぶ(?)ゆしく御のかど(?)ゆるし。
孟 籠愛の事ある人の風をえ

いかしまふ。くろひくろくまふ流かうまひとと。
孟 籠愛の思ひの事もく

ろうひ給へねらんはく(?)ろしかれいつ
弄 籠無

海よめてう(?)すまかども
世のへぎとぞげりうる
ふゆへようくろうる事
るゝ所
とし此ハおもくづれり
ちもそくまつりつ
昨 小の方れ抽のけにう
こつもてよろぞうとえ
おかしるやくらんけくも其
つまの(?)くに 孟 小の方ハ其と
勝こりよをひめる 籠星
ハ細もたひめ事(?)し 弄 小
方よ心と御くぬ数ほかり
うちのゆくも(?)もひけつま
の心よりけまそぬくぬく
おくしさん人のさ白
そよひうよ 細 大ねのうへ
只裏め方ち方々ならん
なれらくもよふきもえ
せひくへ給ハぞるし

のうちきちりしきつうひて。よし此ハあらく
伯のはふ事く 修理 伯有之
しうづれ。ちりすそしまそうつれ其川
つるえめるあ事く
らひよろ川の寵武をおもくさめつそ御へあ
ぎ
しき
ふ。小の方れずめしるげらんれこうとも
細 大ねの事事く
そ給んぞとられしうし給しもぶ達をとめ
よろしめ給つぞ。すひそよあまけくも
さころうまぞりうる人へしそとと御かう
ざ御よつけてど。人のつ事えそらぐまく
らんこしくとど。ハ此くろの心前ともりを
細 一方ひきうりお 通居の事も
まゝひきとりむきまそこ まるれこ らうよ
て。人のれとうろうどとぬべきこし此かうり。
細 大ねの本意く
女ゑ人よおほかりまづさらしられし。人のれ不

河 桂のけよ 孟 常まよ縁の
あふみそろくて叶く柱
札ろうるすありとく
居んごとゑすきりのとれ
河 延喜の帝此方と称
今まはこの君を実とし
きんく
あうきび 細 大相の心
よ源よ密邑を疑し
るそさるもろきとう
まてとえひありて孟玉
と露るろうきそすへての他
まそらそそし り

とぞ。さろあんぢしろきさらぬこのいうじう 武之 細 文書の叙也
書と
しづきむすりてまゐる出て世よりゐうくに。
はかなきこともいしようおかしけりとお
やそゝしうねきれりのけよみへてひめ
くとの年ばかり人みなを紙絵つがひところ
なさおもりく出かくりのあそて。は中をとお 紙屋紙と書ぞの
中のそのしく めとて くゞれてかわびく人よりかれど。唐人ぐしとすさそ
のとはえあすしよく人あつくちゞきて。まえるとめつ 孟 おめ
るまうり らしうけんうつきこのみれめよ心あ。 大かたのよくも
人まもくれあまへる紀の絵よりもまさうてひを 源と玉の中まとく
まそ。これ人のそうしてかしこまんへて
つきよくてまそくい絵ながるぞ代おりなま

魯まうろん 細 まり
うしきあり。舞の号ん
るりやさしくとと云
あすしはくし
とのえおろんこすこは
細 こゑはこともおろんお
ざいと云らし
ゑらうはるばるそも
お秋 出後の世のてすよゑさ
がわてとも秋おしんくざう
いりてゑはきんとそひてよ
ひとうおも
今へうきうの男まそ
細 一度にみなか定まりて
みえうくりまへつくさるり
面目なるさてとく 細 抄本

うわくうれとおぼしまさりつふとし 大わてし
よろん。武王の文ここうしめして。いまは志う 孟 小の篁れ又文也 武 家の詞也
いまめかしきさま人とひとつてりそうしつうん まくつのるし
とすゝまよ。人もうそそひりのし絵つぼも。 人めやうてのんと 本の雲の類也
人めやさしかるべし。どのがあんずるさえ。 武 君の乃あつく
いとひとかく人かろう海よるさつぐひるひ
うぐも地しのひるんとのあひてうゑのひ 孟 武の名文の
んゞしれさひとそらしひそけらひてまとうし 小のまここく
東對し なぐんとえのあふやのはあそりと 孟 小野篁の心也
いひずしう。今へうそうの男てこそうらへ イそらう
つじとしなぐんてとくおまうれまよいとど 細 うらえあり
れとつらもあやまりてうらそへあつま

此一章今はかたりの事ふそて

よきひとしも　明 少方の抱の事に付てそしる事

しらく

ゑをうけう　細 大かた然

なり、ゑをえかるとは

おろかのすゑの少童

孟云宗依ゑをいが

ころをえのみ

此うりもの　細 盤済異の事

此方よの事に猶云人を

云りの八何々をと云ひ

のどかてまそあるべき

物をとし師少方の式アヽ

ゑへ事うるうんとある

とそうんの何くがうつき

ごうひ給ひ、性いとよくつまらんやうにあさま

へる人の、しらさくうちかやまちをそて、人よ

うとしかれぬべきことをしるん、しらずしらさ給

ひらせきへいるじのおやをもちとけなくとも

のくちつくそをあくやうあく、いともりれい

くりそるしまへる、さまどこうけうめうつし

まんをとものくねど、年頃のんずしいさうよ

おぼ抱するねバ、こころゆはいと哀とや

のふ、唯日々よのいとあさえうたる人の

するくひがよろしきをはよるれば

なきひのいとむらるさありてこそみるそ

まいりし方をうらしげり　りそしるし

ひふころなり

方もうらしげよ　細 小の方れ方をうらしげるうあなよきのこハえ手いそしぶうとこ

世の人にも似ね　細 抱のけ

そうら宗海分陽思

女のしもありうちまとさ

小方の大将と云、殊むよ

ゑうとまへ海あうまく

わか　しうくむる　細 此各の

守割東のん心よへあうば

うとみのひうろうとて云

ひけうう何し

女の性ハとそぶうらう給

細女ハそ女盤おき給よ

世のありさ由をとも後

しうてがら安へし　抱

別女ハ走盤なきこ此

少方ハ抱のけそへるひれ

なくやうよのかふらえし

一まうりを定め大ねの

ハことにべきことをもうちむかしかくてな

ん、どうしでも覚ゑてあることよいかしこじや。

よのひとみをもかぬはおうさ海をそこすう

をそんとそいこつるうりひさかあつをも

ぐしうるよ、えかしをもありちうまじき法

うろぞさそしよ、覚しうしむかしきあうき

人ではゆれバとき海ぐうぜ海よつけらく

そろうゆはありじと云てまうちよ、女のれ

心のうずりぐつまいあく、のうく根まさう給

一まうりをきをぐめ給いぬ殺がうをありぬへ

きこしるれどまうをてこそ今まらでし

もし父の志をさとらんとおもふ
そなわりしハ根結もむすこ
れどもなりし
父のきょうめ　細　女こ
そあれど父母の因をし
みてる千代結ろうとし
まことの御ゆかし盃つる
所志実は離別し結へ
んとの武アマの志かさ
兵ヱ衛かくしてうきんとそ
の勘当兵衛とく
いと深くさげる　細　め公夫
ねのえのふをおや方は嫌
喋してその結ふと云ひ結
ふく
りくの名か細　細　め口しれ
へ大ねの御方の女房中
ねハ御方にさふく娘人
しいつ迄もお大ねの三之
男づうしとおかけ
細ふの方のれ　御我男のるす
づうそてハおもそで父に
の前にとて嫁への相手と
孔雨　艶　月

らんじうてめでたやのさゝしめでたうとして
さはやうよかしかうしまゝてんと出れ
のまふらん。夜ひてつもろくしみさこれあてしとた
此から盃つうことのやあらんしつらうじ　細入さる
志結へきうやあかんと打ちかふひてのかまん
る。いとねがけまことろやまし。ねめ志つうど　盃てかけるのやま
るりくこし
ぐらでつきまつるれきぞ。りくのしる中
ねの招りとろでいふ人でずは得どもよつけ
おむりたるのを娘める
つやもそうしぞ。つうしと婦のしうを。小
盃存候
方さらんしてろうかし結めどもそうしいと
盃初けるありかれしきを
なうしうお盃をそてお主へうつちぞく
小方の何し
とぞけろう。八かくしとのまらひそら志む

喋られ　そもの何し

うさ男の此りわらくし
きやうるゝみてなれぞ
給　お　我男の世人乃
やうおもおくぬりて。父
父のをすさ人くり出て
なくへうかくし死を君
しくさかうし。面されれ
うそしハ我男のゆすを
いつもふやうよ相し先
まふま喋るれされだ
今さらじめくろやう斗も
昔しくを思ひぬとえ
そへつけうら　喋くえ
とろつう一年をえ
いとけうらして

おたこしけりるうてよろらん。父のさ
宮古語てと大ねの何よつきそく
とさへとりまぞのまのぞ。わりさて結え
んハいと此しうゝ。御男のゆらりらくし
盃喋るれ志る
きかうおうてるれまぞ結れべいまたじ
めくいうよも梅をとひ給しもぞそう
盃喋
ちそむさまゝるらうさげるり。いとさく
お小方のおう
若を以一段よ
やまるひとのつれぬるや。ここよやをおる
ろへびをなかくぞいとけうらうそあ
かりきうかおけとう。やうよ此ら得そ
まく。けりつうことも此さしし結つぞきあま
じるまろゝれさるハいと衰るり。こ後のま
此わへる所ハおくてちく父をほまりぞ。お

りしやつのうれば
おぼつかなきにも居るに
もんをつけざらうし
そし

まめやかにくらしもてなしつるをとりそへやり
しまつればいづこのよろこびやうなるけぢめをひ
おらんこやのほかにはかりしもいづこにこ
あらはれそむるにさきにもそのゝ海
ひまはしそしこうちへてぞのかひ侍らんとて
ろのいときはばゆるさむの舞によろしくさう
こさるくなからむ海をそいづく入籠もかく
よ人めづらしらんと。さらしつきなれば。こて
ろやまとうつろひてさんと思ひ侍るらむ思わさ
ゆゑのさらに世よしくひるさは思わくしとば
そらふかもえてしもぞうつろひうつりて
めうちかくすかうれおもうにてめぐげなら

がかやの御しくだ。源氏の方
へきこしんそせらうん
めぐし
御中らて　細
ものを清中らくておしむ
まぜとるなり
おほきおほさるせよ　孟信よ
のすべてのふる及びくんそ
づしく思ひしまひこと
かくげなるすべて世のこい
思ひむらうとぞもらんは
おなみなさらにせかれは候
うつるよしろらんと
おとびひこちろし
あらしなかひらうて居
あへとふらひ所　我も
少弱とうらひ少弱
を我を始らんみへる
らし
世の人おもふぬ思ひさ
をこ　孟庵なるたゝ人に
を似ぬおしらん。又其の

こしりかずらん。いとらんいとおもしうる
じけるにはへこよなしくとしろて御中らく
てりのしうく。ことやよきるさまへつとことを
あやしこいはゆ。じとそのつつでも今
文よりさしのへざめることいふらむとなれ
ど世の中しんよきよしからなちはるかも
わくなきりん侍べると。としばのちざら
さんぞうさまにうしろつらんと思ひさとし。こ
しらへさてしまへば。人のつくれば。こと
くとさらひきてむぞ。世の人おもふぬ思の
うきそとらん。これもおもひしなけらそいま
さしよ人になりてらくれんどさこ

歌さあのかくし

それハさてぬさ所にお武アのよハさうれぬ所こそ生もおりくるあり他人ひきさるうとく人の歌どう細むろらと大さの世なりるいハ業しのこともれおそしきつると武アの方よハさくうき孟業のあかづくのみやよるりておつりひまかとしのとうう細く人のおかさハ二紙桶のけかてうていとく今いうけしへてそおりをとうふんし草子よ

いつさむもとめ細業上ハいかざ人のいつさむもとめのごくしてハ枝方をさへハ物世ち

つまふるれど。いとおかしう。いとゞらんとなんさふ。大般のこゝろの方とも、こと人しやハ物しまふうれハさら海みとく物ハ出まくる人の世の世なりくひとの物やごろりくるいまふつくさとるん物りりしの絡るれど。こてみはとくを言よハさくさうかくすぐしもとりすやりくるいうまりん海とえうだくうとの事へバいでとくうの絡とれいのれこうかりひやくうしきこと出うん。大般の少方のもう絡こしよみも信うぞ。いつさひもとめのやうよりまてなりのぞくしもひ物さうれひとのさんにまでいなり

文章へうりゆん 業上に 孟 小方之業上 業上をいうり 細むろ 細ハ子り 細よもうくりし小方れのまもく 孟ちよ子記し 武ア口のこ 細ちねの旬し 巽 業上のこと 孟 業弟子のまさで

それがましての人の心のをハいてさおるまのべうさくとくしもハなきえ化うお業弟子の孫方のまもとりなし

それがましハんとるそ細るおあやくの業全てまかべくるのをで

ひうしたはこうりて細 河海ニみくうり業は古根ちつぶやれるつけて我もいいりて出ぐさるよふうへうしつひまでくし何くわてう日本紀第七云

絡さん。や人乃れ物やげんて物しまべうめれどうくれて出るもおくしくバいでとるしくるさとも。日一日いりあそびてひょうまゐうれぬれどもくらと宗まりうさあてつひくえるんと物かのきく雪うりてれくふりうらそ人りいぞんも人めいともうどの流氣多もかけよりをバうしさうぐう絡で。まいくとうけさ我もわひ物かへりそまぶべうぐくとでかりまつれうまそてきりて人の家み海のいとうろぐうしられバ

細 武アロのおいのみなるり 孟 汝ハ生ころて 孟 去ハ汝まは物ししてう 細 小の方のを 細 ならくおして

以燧出火向焼而得免 河海日本武尊東夷を征し給ひし時駿河国の賊徒野にして

やうしよ草かりそめの劔にて草を外まで向火をつけ給ひて燧をまうさうを[illegible]

まさらりもあひ都して燧をたてさうらうとりて

今はさらりとむ表なり

こゝろひかりのうけとて火を

めぐりて

みをこの比そらんの折て

ぞしらぞ 師ゆかり

いつか のまひなぐら秋を

ぐしのかくづらの袖ぬれせ

じんの[illegible]もあれども

とのゆへ[illegible]のゆくこつけよ

のまりて

とひぞれつゞうしるじことふれが

らそらくらくらおかめそるまとつり

山のおくしきとそしおやふくるめらゆきさ

いうぐ紅葉んともそん秋もみけねめり

やとそぞのゝ紅葉今は跡のとゝそむとる

と。まりひめぐりしまゝる氣色いしあくれ

まりくゝふは、いつぞりとのまよのう

うれこのごろそうりそうのゆびとし

らぐとうくひとのいひるしゆきやら

をとひぐりこそらよ [illegible]

くりてうんとぶうえあしんいつとかしく[illegible]

ゆそ[illegible]しそてあへくこくよるすじまてし。てい

んやとくえぐりうんぶくしよのつるけり南

しきこえまふ時は、おかくぶ俺よりくうころ

もうさそうん。おそれなとあひ笑ゆうをすぐ

るゝしひきんで、立ちゆうり紅葉そも。店ぐの

おりくうしいはおかくらうしうとおこべかれ

しるふんくをとむひぐすよ林くを紅葉ぐ。袖の

氷をとけるんうしあど。なぞやゆくまつひ

ゐるまへのも、出火とりめして。つよくしくさ

志めさせてそまゝり紅葉。川へへはれん

よう流そぞもよ。ゝらうしけくうれにそぐくさ。

くよめつ(ゐ)みる

とさそは嬉しくそよそえ

ふもくゝぬすぐことよ

くゝかゝゝそ

袖のおも 細 恋のつれ

あくにあつりそのよい袖

の氷のとけざるまじ

師 国の隣わるべしるの

へて

古火とりめして 師 下音

の火くゝりさめしよせて

雛遊よしくさうめさす

ゆるし

いくそうくしはおもし
孟 病しやせおとろへ 師
ものさびやうなる人の病
こゝやをうふさ申也

いかでかゝつる年月をも
あさかりしとを契りて
かくのふれ方うそいようく
さうつらしとおふまで給ふ
ことはんのこゝろしすうへ
雅ながしくろくもさき
心ゆくしゆりふうらふも
祝かろくのかへんそへ
りわかされて心けさう
どうかふすこし一旦の心も
物来よりいふの方の幸心
まそるとやうよ猶まづの
まへるさ面の表なるなり
よりてし

いと悲しかりけむ也。さめありてゆくへす
るいとこゝろぐるしれめのいとつらきさへ
世の中ぞすぐれものしかれどいとあえ
れとこゝろはいつくありていかで也
しつることは月ごろすぐりなるらんお
ふかきのへてしうつきさぞやはゆかりふく
れうつらげなりいとくちをそこそうげなる
とうしつゝなづさはるゝしのびて
ちいさき文とりなしせて袖より
いれてくちをあるしもてつりなりしさればでよ
ゆるくなるにそこそくよりてもかゝす
びかされひりよしてゆかられどいで

よろしひよ人てまもりて
おそれのふみもおりべし
あれはどの人の方の所
大相の方ふをすけ代
のくて雲の後ゆかを
のまのふもうしと

中ねりくさく秋のしや
しやいせく少将の心にせ
しものゝのきんじもかう
へし

ひさくかへの下ゆるる
次より 細 袖より引入るゝ
大和よりあへどおにゆ
次よりてそいよくたき
しめまりまふとほし
次よりあつかへし

あさやうよおくしさき面してくゞへ
しとしど、ぬぐうしげりうぶさくひよ
へてて思ひして、雪すゝしひまあり、秋て
みけめとんしるゞうすゞなまかり
えおしてそゞのしこゝくて、こはづら
あるゝ、中ねりくるゞ、おそれのやるじ
うちらげきて、うすくひとくふしこゝま。
そうしこはいさゞうせまひこゝげゆくら
うさげようつしまうりとこゝ冷ごゝ
ふそうよゆきさあゞりてゆかりさかこゆき
こらりつゝ、ひそかりをしりようとて後のゝ
しつよりてざとい、けしるゝふかどへ

やのこの下煙かすかなるもわ
れひとりをのこるすべしや
ゝ五月

ろくそてくしきよ
お幸ならぬ思ふもち
こゝこのおろ　と

何微之渉く細しもあるべくおれあくねるども同じ詞に

のやうにおもふ肝じをしるゝ。おさまりしさにお
られてもの、しのふ。さうら海ゝるゝこいのめ
有甚の
られなる、へて。せかくれて、ものをせかしぞ。
らうひきそしすべ。へて。母らうさへくれて。
れぞどもめてき結川。うろしやそてゞゝ結
ふぞくしさくぞやすきあかりこそべくてもおくれ。
おきかしそれど。生ひの床。もの、けの。人すむ
ともさまんとするゝからしかまへ。かりきへぐを
いておりうこもろ。立さはぞさてしれぞどもる
まうく人ゐどもれどそぞくの床のほび
人かまゝれ千よ立の角。ゝまろ川めあよ
細むろゝの居りをきり
きらくうらすれ。ぞくてもしをつらし結

そのよさるゆりくしゆしんでまべきさよもおもへれ
細大羽のなくき八曲のけれさらまきさく
らくろさぞんひとひつへんすぐしくすもをめざくし
うゝうらあ。人のかまくに結あうりやとし。つまうり
きをくれ。うとましうねうりてあられとも
ひつらまものくろれねど。このほおくぞゝ
いろこうぞさてし出来るゝんと来いてきさめて。
夜ゐうよ幾めれどそこうるしめでてうら
少前の亀き　細呼唄く
まりさもくぞ。こずひのくさる結声ゐまぞ。
さうくとを結んゝよこしうり。夜一夜う
細妙老のこらくき有どすりて
されひかれあるさしまひありしてまそでゝもくつ
おむろへ文あるく
きらやいくこまあつ。消どよ。うしへ流文さ
孟文の詞
てまうれをもよ人あはまよきえいろ人の詞

れんぺきん雅にて
孟子の浩然の気をそこなふ
まりの人のこゝろし
こそろへ　細　書きまでは
權の字ゟも有り誠に秘
一絃の琴に於ても花るよ
彼をとつらえ天たとき
よりとそりめ字は發れ
乃ち氣みちまる紀ぜ云云
らふ人とつゝて抱のけ
も見るとぶるてん有り

ふとときめき　細　夜がれを
いまんくかハ何天とひ絡
つぶりとお紀ハいつしと
おはゆめて　所むろくと
ものゆめかしてそがれ

しよふりゆきのたしこと
あのりのぞく
やさしいゆしよ男さんハ
のえそてるんぱて
ろをべきかそてへ
ふよふりるすふべ
つきりんとこゝそく
ようこさしてまへ
とうろへそこ
ゝとこすれし
さうさくしてまへか
ともりさえつかうしてれの神
さへがつてそこ
あろうさらやてしよ川
しやうよういすまへ
まどくしくよかりしきこゝろ
まるしゝ
いとさくしげんぶえりしらくるとぞ
しもの
し給ひをうりんの気しぐれとするよこと
かされ
かされぬるようくふときめくてしまるるとかん
ものれのりわいれくりるし
ゆらくしらん

ぶきつくおふしのふ少方なるけいとうろし
げよしまへば修法もこそでめさせよ
こらのもらゆをはばかりざまへる
くるしぶたよあへせこまへと絡ん
よめふまふおそぞろふろくへ乃あかれる
みなちきこくいうかまろくさまくをべ
をよさうさけくとられとふるまへりうかれ
ぶ倒のいそぞいそでまあそはまそぞくのこと
なるとめやそくもまこすし給ひぞよまあ
やしうらあくぬき海よのことむつら
給ふとおぶやうるられるを給ふしるども。えと
つきめへ給ひくいしとぐるし。よへのえやけて

ふしょうのこゝろうへの
お宮之は少方生ゟハ心よ
さんとゝしそれと難意
ゆきつりられがいこそろ
どうふも忍びてれとし
ゆさうぞく　細　少方へいろ
その池のまがらにのこま
しまぜ給ふらの油裝束
海池しつつひておろげ
うらわんざろく花やめ
やそくきつくうまさ
ともおるすそせあつせさ
不用
むかりまよさのきやう
なり　所　日比よ　大ぬの裝

来らあれバそ腹立まへ
ことなくもあるぢやあるら
幸義なれハくらしとくなき
わし御とりてめでてくれやし
ふもくへられたら　掛詞
の香よそへてとる也

ゆらめて　細 独とあれ
よしそうり　所の名 小方
の夫ねよく植られて根ざし
ひわがりの王である家のやく衣
をとこがけしと見ゆとよふ
よそへてわり奴ととを
そうらうへし
うつの人は　細 大ねの心
守りむずしてまとろれく
物も此りくの夫をどよ
物をもいひかれてきたり

とりてぞしましげよこぐれくらうはあきらひかる　焦くそ新香人
そしてやうなられぞそこしとよくらう香を
志くうりみをぞへられたら月じとあくくるよ人　河慍 光子経こしむ也
とうむじ給ぬべきれバおぼさく人て　大ねの給ふ
ゆきてのちどいそうつくろひ給ふりくの夫に出ゆとく
ゆしつきこゆ
本意 ひとりみてこがろくむねのうらまれる思
のまれろかの日こぞそうし名所なされすて　細 りくの夫の心也
たすいをあすろ人へ参るはしうぢまやそうてくら
ゆかりひておうちまう　いとつてしさまれどいゝる　河 傷しかあくる心と
なくそてかくうの人は、もれとひろんみずく　人ねの心
のくぞ見えて給ひうつ　細 是ハ信有さるとみまは他の浮く
かすけうさうしよ

うくさすそそひ　孟 く色
そうりとハそし後悔し
ころくて小方の所とさえ
まいとくし祇園日おうき
すりて小方の袖のけの
くハ此宮名の床なずの
ふうは深いとりしきそひ
のそふくて
このあり身をもすどよれを
しまてしおつくぞちうぐん
細 むかしくつくと小方へと
わりつて二仏の中有
なくえがでもくうそては
く孟 小方の事あくまで
まこてしうしバ又もきう
われん、りしきもわすぞ
夏方のゝまより名をふまず
ここ二仏の中ちの身と
あるへしいとく前仏既去り
後佛未出世也
わうましきてきをとつきき
おわうりへしりつき給
つ袖のけのつやうれる
とまし出て恥合しさ

細 大ねの心を歎く
うさこし紙にひさうげなる面ぐよく向
おうかりぞつぐうらそふいてく　のかく
たうしとをのりしやてわらバちうびん
よたりめぐさ身なりめりとうち致て出給　ゆけさ
細 むかしの方よりあはり
ぬ、ひと夜つりの酒さるよ、又めぐりくうあら
しさまくりてゆがりし給ふき渡よいひてぐ公　むかしの夏息也　小方を深むこと
おむかしの方よりのを舞尽のゐるまふし
とまくべくもあしぞゆがりしてくうかれだく
ひさしうこりねしまくり、修法なとききさ
はれぞれりのけこちうくとうりてかくお　おうくしくうそいうて　小方のこと
おをはすへぞ、おうまじうてずもつさうら　大ねのこと
がめしうてしうすしびあがうあんとめそたし
うそしりつさしまつきぞ、願よりうり給ふ時　孟 ひけ思の命そのあうさ申と

すゑ文あつめてかくあつまさ
うちの子と火おこのえい
まさひらりまふし

今ハとうりとえうすよ
たねの少方のおもうたうり
まえぬよつけて。今昆
までの手と松りを小
方のこと

と。こし方よくわすれぬすて。ゑんぎまでちりと
ぞよべうちて。こころそまうり給。女ひと
ゝ十二三ばかりのみくわしくつづくやさし
こゝろんかつしもちうらきハ。年ばとなりらく
浙中をへてうつひがうらそてなるらうそれ
ど。居んごとなきうきうぶらくさすてなる
ひのまれバ。今ハかぎりとこ給よ。さうて海
人ども。いとじうかれしとやふら。えたう
まそ。いまハとう。かげたるれてかく。いぞ給
らんよ。さそんづうくおもし給。いておりなう
人わくたるこころり。ぞのうめうへりのり

ぎりて。ひとめうよしきしるとじりとうけ
づとれさまうんとくらてしまて。紙よはもろ人
あり。小方けんうらとこうし世いつようりて世
中をあさましうおもげと給ようくも
えまうれバ。さうくらくしとまうりて。人のさ
とうんと海ぞうてやひそぐめんもい
海すうしひとこうしんへよてそあうめるて
出げうし河。はるくよの忘ぜ。是清盛ハ上達
アよ扱くすわれゞうくしーよそ。中納給
武アノ大輔らうど。浙東こうぞくりえておりし
うりさそそいあぐらめんとうぬてそつう
ちろれどう。わうりてそふとうぶりと
さみぞうふつくふひとぐくきわうくるさ

人のさえてそんさ曲を
師人の絵易すらひて。何の
就ことろうくて又えへ人
てまうんいて一人和皇
わうしん歌か人の絵
畢ぬさ絵よやひぞん
とのそて
すお給浪武ア大輔　晴云
楽贈の会すて。同式アを
家の息なく。武ア大輔に
但せうつきてう句絵気。
一動もりへ出武但友句
絵と

とくしころうしひまらぬ孫
どくしは　孟子文公の所を
孫のごとくあらんとの
心しおし此孫いさ為の家
中をまもりして従え人
るゆへし　師小方の安危
るどの又文公のくれ孫
住をせりく佛しりん
とてふらし

あくり、とくしごろうしひ給らぬ孫ずまいよ、
お武がて文公よりひすさまうて此方へせわりへし
とけるくしろうしては、いうでうあまきさつさ
わうんぐくへいともつくきしくよおうりでくもぶ
まくせ給るんよるすごさつしめくゝんでどとの
ぐぞくろうろさ物じとるすごさしまなくこび
やつまうてきごうれちうべし、れでうじとえざるべ
きにられちつうめきさるえしするまうてよ、
うきりしとるうさきはさるうへ、いうしゆしそく
ひけ主の子息主く
み色、寿延はおりらう給もなくるく
おりみゆし海ふ衆、もくぶみうさねよ
孟小方の何と　書く
びもくへし海ひく、み月うしはいくまて
ろうきゆんもくせ、いまははゐんさくくつれんだ。

ぜうしえぶらゝ
暁　須恩の少方へ行りよ
ひろべしとと、今は息
給し
ふあのおんせん　暁うらまそ
へすうり給ん時のをす
く母君のよろび給し

ますまはさつくれて安六
そあられてえひとくやうれ
てのくとし、乾蘭此小方の
えくしの男君達の立身

こゝの世うり給ふも、みく、まうりとわるくぐ、
いとくらくもさうすしくさらん、此ひときさにととそう
おみまうらのまし
でさみぎるよるりうびひ給ふりんすへ孫でくいわめぐいろ
孟沉論し
孟孫孫の姫君の子小方の伺と
しらうもあるべいうれ、ひあぞんてとつうとと
うまうとも、とのれよそゝひさま中あり、いまこ
細又の小方をえさうるとし
あんぎ達へいえをうふすまもうでうこしへまこくとまうん
ひけ主をそして
よ、ひとのくにとふめまゝぐくてもあるうさそひし
武心をと
あうてこそくごしうあ、文公の此とんをとんれど。
細泥田庭
うきの給よまうらひきすともゝの此やどぐ
天下のそへ此二人はようく給えして
まらの此くよろうれんろうりしそしうらうろを
孟孝立られて
くべきさろうりぞとも、きすぎるまろうれらゝへ、今よ
随遣も、立事遣
とおくうんてとかうくいうりとそ此とそやし

さがくさすよつひつげけ
し徳まうて 孟宰志方
られて青表紙めされ
巻第紙に 徳宰志られ
てし可耕く
青梅絡 頼吾西絡嫡女
と又へ金氏まさひしう
じ継母のそしやうり
てまろそうまめまし
雲孟同
そのたちふく 細 小霜
の母とを形ぞりまそ
なかくてあつれや
うのまう出来めれば行
うち祝めかりつゝ有すと
し曝 又まと云形ぞら
こし孟同
ひそりあれ徳あん
孟充もつくそげしく
ありんそして所追へのそ

ひめぎゝハ歳いてくるすう
孟まきぞしらハ方ねの一
所をまふすれバと承ぞひ
とやきんと云すゝて
なまゐぞと申して
細姫ゑへ方ねの重まさ
きよりうくつうく名
おもさひまて
共とも立らうのまそうすんと
給ふそし 桂花のゐし書
の面勢の方より給り
名へりと給すて
くられまんますさにうど
こまひるんや 細田ハ書
仰れバ面ぐつうのかえ
こしそいそぎまへてれこ
なさんハ候てとし孟方ね
ハ是てむづつのさまおハ
まそしさて孫よ日られされ
ばいぞくおハせんと推量し

まひきいりつまじらんこし姑の世まてく（お母さまこそ人の命と）
いまじきいくなき給よされうくくころ
いそひまねどうらひそまへうてさおやさ
うも青梅絡るじとそうかきもしのつまの
んぞしうつきかやじまゑ何まうひうへ
そうくへいひとろうまのこそ姑ろれゆうしく（細孟敎訣）
さのやうしてそろゆへかざうよ名ふ姑あさと泣（お祝よのうろやまハ好梅ツ並の此男達となりそるべしとと）
うろえんうち本ありてとりくなハ給え
じとれめのうどをさうしびてのあひな
ぢく日をしられ害ありめぐさ宛の乱ぶ
ら伺そうとゆうみありいうてうあれ何し
うんなむそれじりへのをあぶらそくの

ゆめして（浦滝のまへ）ひめとのひつてうずめ母とてまびひ
（桂花と）めぶくさハ歳いとろすうしなりまふ 孟文
（桂花のいとし方ねをつひよ兄ぞしてハえ方にとと）らひよとむまりてハつぐくあらん何まお
（ま今ゆくともさうともそして）じもさくしてゆうさおひらぬやうりまそ
あれとねがすまうハぶし梅しくえまさ
なまじと姑りわしろをとく姑がしろうすん
（小方のた）いとんうきるどうらんさそて給ぞでハまき（桂花の石）
（牧文ハ桂花のいゝ而祝）そとまくり給いるんと給ふそしまへどゆく（妾子）
（のうち給桂と）られまんよまするうごさ給ひるんやつね（姫君）
よるゝねのまふひむづし姑りくのをしうさ
人はゆづるちし給を哀まてひめまんひ
なぐさ女のかこのまるさてでいさてくまうさそ

ひまごとに　細　よるべき花乃
名なりけり。孟　桂皮
名敷葉の御きづく
ろふさし
今ハとて　細　夫の方へ
息より槿花の主と云
師当られぬとも此首
を詠れゆくとものこし
ちる花いそぐやとて
師　源氏の歎きまふへ
をかくしてし、方の名を
ぶる御詠つるころし
ふれまとへ　細　槿花ハ源氏の
ものちり表はひ出れるの
あらとも此御どうに
あるべき也よりていふき
とし。孟　其の花ハ源氏
を夕顔なる花ハことひ
云ひあとも。いふなり。
源氏ハあるゆりまても
あるとも我ハ名なしどい
ふつくなさずそれバそさ
し也　之御方式部出候
朗し

さしらのひまれさうるべき海ようるがいのさ
をしてなしられさまよ
槿花
いまほどそやどられぬともあるまる
まきのそらしらハ我を云ろなるえまさぶら
でるさ路なしき、えいそぐやとそ
るれさうはやりいでとるすふらんさ
ちもすうべきまきのそらしらぞ、出家たるべ
ぐきし海ぐようなずくさしとなち方。末
草のりしまんでひしくんしくめぐる源氏
そ。そるそらんあつう。わくの夫へとのくれら
さのへをとぐすろよ。平ねのあやりし
中将
あさうれど石つるのかいとくちそ　やどし

あさうれし　細　此君ハ中将のおもう
とぞなる伯と、おきまとさしてあへ
ととらく。も君のため
細　我もそりれしざりけり
孟　我も秘とよしべきにある
なしし師中将の方よるう
の水ハすくなそく名ど末
二のあるよ泣してくるれば、
もろみそうろうも心うて
とそのかり別をあくるる
しきろうし揺りしろうさ
もろうし云くうけるむべく
ハ秘之
くるしまでぞなうえ
細　文選別賦ニ親賓木ヲ
於古里ニとあう花らすむ
宿の梅と存くもるろし
近まゆうらしたや
恋うもむゆくよハあしそ
おとねよるぶらとさふれ
よハくりんぜる之教年

おえやりけるうべき、おもげざうしける。
王女ハとぐやら中将ハ女方よ付て我れて
くて別そてまうもんことらくいく
夫君
とわくもいそきまのあれりなどつれ
よむべくもやりでぬよ我、いぞやとそうらる
判之
く、流車ひきいぞくうらくうるもまるさへ
いのぞんとそえれさらくそこ
めでくめてうてまてぞうりつ
そて西向く方り
ぐもひゆへよへあしで。こしくとし
れもくこのいぐゝうえのびぞしろうすくいそ
細そうり武君の方へ出るてのこと
ん。名よハまうとらいうじう花れ
の母之上の後ゆ
水方ろうさきつぎまで。けれさゆぐるめてうさ

とやうし肯れ名所ハうらぞとく
いそどうあがしうり　細　一夜婦妻して後ハ共まゝ夫婦うるゆあらまじきうれびて
母小方　細　業上の継母ろうぐうしぞうう人のうしおての老ふもえてうう

女はども　細　杖ね中宮を
入内させて武ア々宮の女は
どゞぞしろうやうしみし乏
るうり
此事の恨とけざりし
細　源氏への書状あすりし
事あり。佗ハ今ハ恨をあ
きあり。業上のゆかりを世
ひ継ぐ。世のそゞろもお
ろ活じきりのそゞろあり
既にまた人の此世をさえ、
て此文書後もあう也
仮く好而知其悪之心也
孟同義
人ひとりを　細　業上と竜去

しまうらしもひいづしまへれど、いうぞうらのむ
りのあうつきよりかけりんとしてそハ妹とも　河欲アス
ぞゆれ、女はゞとものとよかれぞしきろうくりそ　元於冠源の女は武アろの佐むそめし女老に入内ありう
あすし継しうどそれいは中の恨とけざりし
但ど世すりひ去れたよろこそいあらけめとあの　お武アろき
のそひのあひしとく
のさまんひよのひともいひあすしそでてよろ教
さそいあうべきゞ人ひとりをえりしづゞ継さん　孟笑のすし
ゆへいおとりまくもわふさめしてそあ　孟意之
れどうろえきりしとなりそうくすゑよせて
おむろうのうそ、源をさうしてゆをと
ずろうるりのこうしづうきとしてどのれかる　源の先なほ志ある

もぐくこのかるすもうきとあく嫡嫡
そあれかうしまるいつとうする
悪ひと釈よのそでくあれバ法もひ
まなめをしそでね人と知りよれて
へし是業行くの後あれとも

つれるとそうそのきざを
さうげるすくて源氏の内
の人の恩不忠のうちろむ
けるまそびびて其恵を

嫡嬬甥姪皆列土とうてそうりのとしく
お源よあろうの盛道のふしぞてかうしのかへいうて、総九
孟あかうんの叶ゞきゆへハよ妙舞羽衣のか美くしく

しまへあいとおしきよ、志かくるうへのゆうぎ　孟子ね人実法ふふうそし
東あうまじきぞとそとうまさりそしづき
すみそ、いうづつうらぬといひて、けのく志う
まへいぐ宮めいある咲めくやようよるんつけうれあ　武アマし　孟那之源の主をまとの後
そぬ物とて、とくらよまうきそてあゐらしめ継そ　源の志もぎとらう
りうさひといひまぞきうろむくひもゞれとも
ことしてそえりのをしれくめざれ　せなとくわ
ゞくのあうつあるよてそいあくめづれるよう　細不孝し
てくれなのあさうそ継し世のむくひいうかへぞ

そのかみふしも

よろせのかゞきよ〔宮〕よら
おまり　花武君〔まゝ〕の奉
の〔佐〕賀〔人〕と〔篤〕上の〔わ〕〔ち〕〔ら〕
添〔し〕る〔の〕〔し〕〔心〕母の〔書〕き〔よ〕〔り〕
堅〔日〕孟　〔業〕の武〔アマ〕〔文〕〔章〕
の〔わ〕〔え〕〔と〕〔さ〕〔せ〕〔の〕〔ふ〕〔と〕〔よ〕〔も〕〔源〕
のよりりられ〔よ〕〔ろ〕〔く〕
太〔粉〕の〔表〕〔くわ〕〔ら〕〔添〕〔よ〕〔ろ〕〔と〕
花太〔粉〕の〔よ〕〔小〕〔青〕〔文〕の〔小〕〔方〕
〔へ〕〔川〕〔ろ〕〔ひ〕〔の〕〔よ〕〔る〕〔と〕〔を〕〔よ〕〔う〕〔て〕
の〔ま〕〔で〕〔し〕師〔あ〕〔や〕〔し〕〔く〕〔と〕〔よ〕
よ〔う〕〔太〕〔粉〕の〔ふ〕〔く〕

〔さ〕〔う〕〔じ〕〔と〕〔い〕〔ち〕〔つ〕〔ひ〕〔き〕〔て〕〔よ〕〔に〕
花〔小〕〔方〕八〔歌〕〔舞〕〔妓〕の〔小〕〔方〕〔の〕〔事〕
〔き〕〔う〕〔ひ〕〔き〕〔て〕〔る〕〔と〕〔合〕〔よ〕〔ち〕〔八〕〔か〕〔ら〕
〔あ〕〔ん〕〔ぬ〕〔と〕武〔アマ〕〔文〕〔の〕〔さ〕〔し〕
〔よ〕〔て〕〔ち〕〔あ〕〔ら〕〔よ〕〔く〕〔し〕　孟〔和〕
[illegible]

〔と〕〔文〕〔文〕の〔く〕〔ぬ〕〔ぐ〕〔し〕〔と〕〔く〕
〔く〕〔お〕〔や〕〔し〕〔さ〕〔こ〕〔し〕〔ら〕〔ん〕
〔小〕〔方〕の武〔アマ〕〔へ〕〔おかしやうす〕
〔と〕の〔ま〕〔ふ〕〔く〕〔ひ〕〔ろ〕〔て〕〔と〕〔れ〕
〔ト〕〔さ〕〔ん〕〔よ〕〔う〕〔け〕〔く〕〔ハ〕〔ふ〕〔や〕〔を〕
〔ゑ〕〔れ〕〔と〕〔も〕〔と〕〔し〕〔掛〕〔武〕〔日〕
〔さ〕〔そ〕〔う〕〔ミ〕〔す〕〔と〕〔よ〕〔う〕〔く〕〔ろ〕〔て〕〔も〕
師〔仮〕〔小〕〔方〕〔ハ〕〔ム〕〔し〕〔さ〕〔人〕〔今〕〔れ〕
〔バ〕〔玉〕〔ぶ〕〔ら〕の〔お〕〔か〕〔さ〕〔ん〕〔よ〕〔す〕〔を〕
〔み〕〔も〕〔遊〕〔里〕〔に〕〔恥〕〔る〕〔べ〕〔き〕〔て〕〔や〕
〔と〕〔く〕〔か〕〔ひ〕〔さ〕〔れ〕〔バ〕〔文〕の〔志〕〔ま〕〔ぐ〕
〔ま〕〔そ〕〔め〕〔け〕〔わ〕〔う〕〔と〕〔し〕

〔き〕〔う〕〔う〕〔人〕の〔た〕〔く〕〔ぞ〕　〔掛〕〔艶〕〔ら〕〔う〕
〔向〕〔艶〕〔綸〕〔掛〕〔貴〕〔花〕〔田〕〔ろ〕〔て〕
孟〔太〕〔侍〕の〔装〕〔束〕〔し〕〔長〕〔綸〕
〔掛〕〔貴〕〔柳〕〔下〕〔説〕〔装〕　〔青〕〔き〕〔綸〕
〔之〕〔暁〕〔同〕〔柳〕〔下〕〔装〕〔き〕〔つ〕〔を〕
に〔ま〕〔つ〕〔と〕〔し〕〔ら〕〔ん〕〔西〕〔下〕〔が〕〔さ〕
〔ね〕の〔つ〕〔ろ〕〔ハ〕〔時〕〔気〕〔は〕〔よ〕〔う〕〔く〕
〔ね〕〔ま〕〔や〕〔一〕〔畳〕〔下〕〔装〕の〔色〕
〔時〕〔気〕〔は〕〔よ〕〔し〕〔つ〕〔く〕〔俵〕〔梅〕〔八〕〔十〕〔一〕
〔月〕〔よ〕〔り〕〔着〕〔用〕〔も〕〔つ〕〔く〕〔柳〕〔ハ〕

めいしりにてこそハおわさい給めれ。その〔れ〕ひ　〔花〕武アマにん〔書〕上
とりどいふらべきゆらと〔ち〕つくて〔そ〕〔て〕〔ん〕。ひとく　のゆりとそとし
〔せ〕〔も〕〔き〕〔う〕〔よ〕〔の〕〔ひ〕〔で〕〔き〕〔ら〕〔よ〕。〔家〕〔よ〕〔ら〕〔わ〕〔ち〕〔ろ〕〔う〕〔と〕〔れ〕
〔と〕〔あ〕〔り〕〔し〕〔が〕。〔そ〕〔れ〕〔を〕〔こ〕〔の〕〔世〕〔乃〕〔め〕〔い〕〔ぶ〕〔り〕〔そ〕〔や〕　〔細〕〔和〕〔方〕〔之〕
〔こ〕〔ぬ〕〔べ〕〔き〕〔ろ〕〔あ〕〔り〕〔と〕〔の〕〔ま〕〔ふ〕〔よ〕。〔つ〕〔め〕〔く〕〔ち〕〔ら〕〔し〕
〔さ〕〔ら〕〔て〕。〔よ〕〔ま〕〔が〕〔く〕〔し〕〔き〕〔つ〕〔と〕〔み〕〔で〕〔と〕〔い〕〔ひ〕〔ち〕〔う〕
〔し〕〔給〕。〔此〕〔坊〕〔が〕〔小〕〔方〕〔ぞ〕〔さ〕〔が〕〔れ〕〔抱〕〔や〕〔け〕〔う〕。〔太〕〔粉〕の〔え〕。　孟〔若〕〔子〕〔地〕〔之〕
〔う〕〔く〕〔ま〕〔う〕〔添〕〔よ〕〔ろ〕〔と〕〔き〕〔て〕〔お〕〔や〕〔し〕〔う〕〔わ〕　〔嘆〕〔玉〕の〔青〕〔そ〕〔太〕〔粉〕の〔せ〕〔文〕〔給〕〔之〕
〔か〕〔く〕〔し〕〔き〕〔す〕〔う〕〔し〕〔ひ〕〔の〕〔や〕〔う〕〔よ〕。〔わ〕〔ち〕〔く〕〔べ〕〔偏〕〔そ〕
〔抱〕〔し〕〔お〕〔ひ〕〔ろ〕〔う〕〔れ〕。〔き〕〔う〕〔じ〕〔と〕〔は〕。〔ち〕〔う〕〔ひ〕〔き〕〔る〕〔と〕　孟〔小〕〔方〕〔之〕
〔よ〕〔と〕〔は〕〔く〕〔ち〕〔つ〕〔き〕〔ら〕〔わ〕〔り〕〔る〕〔き〕〔抱〕〔と〕〔え〕〔や〕〔の〕
〔く〕〔り〕。〔ち〕〔う〕〔し〕〔か〕〔わ〕〔千〕〔り〕〔し〕〔ら〕〔く〕。〔え〕〔ぐ〕〔ら〕〔も〕

〔あ〕〔り〕。〔人〕〔め〕〔を〕〔い〕〔と〕〔め〕〔し〕〔さ〕〔よ〕〔ち〕〔ら〕〔ぐ〕〔れ〕〔て〕〔か〕〔え〕〔の〕
〔え〕〔ろ〕〔よ〕〔う〕〔く〕〔あ〕〔や〕〔ち〕〔つ〕〔さ〕〔く〕〔し〕〔ろ〕〔ん〕〔給〕〔ち〕〔か〕〔す〕〔ち〕。〔せ〕〔わ〕〔く〕
〔ム〕〔や〕〔を〕〔く〕〔え〕〔お〕〔の〕〔人〕〔ち〕〔せ〕〔と〕〔ぞ〕〔さ〕〔そ〕〔う〕〔さ〕〔す〕〔こ〕〔に〕〔う〕〔く〕
〔ろ〕〔へ〕〔て〕〔と〕〔あ〕〔り〕〔ね〕〔べ〕〔き〕〔ん〕〔の〕〔こ〕〔ろ〕〔や〕〔を〕〔て〕〔ち〕〔を〕〔お〕
〔ぶ〕〔う〕〔わ〕〔り〕〔ひ〕〔の〕〔人〕〔つ〕〔ろ〕〔よ〕。〔俄〕〔よ〕〔う〕〔の〕〔こ〕〔や〕〔の〕〔抱〕
〔し〕〔き〕〔の〕〔よ〕〔す〕〔ら〕〔ん〕〔ひ〕〔と〕〔の〕〔こ〕〔く〕〔ろ〕〔う〕〔く〕〔も〕〔る〕
〔さ〕〔け〕〔る〕〔き〕〔と〕。〔ぶ〕〔ら〕〔偏〕〔の〕〔め〕〔き〕〔て〕〔ゑ〕〔う〕〔う〕〔さ〕〔れ〕〔ん〕
〔と〕〔そ〕〔出〕〔給〕。〔き〕〔う〕〔人〕〔の〕〔け〕〔ぞ〕。〔や〕〔う〕〔ぶ〕〔き〕〔の〕〔ち〕〔く〕〔さ〕〔が〕〔き〕〔ね〕
〔あ〕〔を〕〔よ〕〔び〕〔の〕〔き〕〔ろ〕〔さ〕〔し〕〔ぬ〕〔き〕〔て〕〔あ〕〔ん〕〔く〕。〔ひ〕〔さ〕〔に〕
〔く〕〔ろ〕〔ひ〕〔給〕〔つ〕〔る〕〔い〕〔と〕〔り〕〔の〕〔く〕〔し〕。〔う〕〔じ〕〔う〕〔に〕〔か〕〔げ〕
〔ゑ〕〔う〕〔ん〕〔と〕〔人〕〔ぐ〕〔そ〕〔こ〕〔そ〕〔て〕〔ま〕〔つ〕〔を〕〔う〕〔ん〕〔の〕〔え〕〔ん〕〔そ〕
〔く〕〔ろ〕〔こ〕〔と〕〔ぐ〕〔り〕〔を〕〔さ〕〔て〕〔給〕〔よ〕〔つ〕〔け〕〔て〕〔も〕。〔身〕〔れ〕〔こ〕〔て〕

夫己ハ御とも兄とも夫ハ
初兄とも同事之

をしく給んし事へ
細 男としくかう夫妻程
の高きとみのすふなるべし
ままとよの人は 孟 夫婦
の間に此の言此拍のけを
ええかして是つるとはやう
の不とも云いうべきらうと
いとおりひのやしなはん人は
細 心づかく隠ざるまん人
はいか くでしらそふ づきさ
るすまハおうくそてとし 少方
のすそど舞星の云すし
孟 夫婦の紙なれたるそと
のんとし

ろづさるかり空し去りられども やり給（とらえハまそく おか申又よろくさまつまさそく）
いざとうやよろしくきうてんしそ夫とうじて（孟 又兄弟夫とて知られとも兄弟不之為給し）
給かうよ兄嫁まおりしられバりくのくえんみず（細 夫婦の所言之）（師 桂程の云）
いざゝそおうしき海そうきてし也ひめごえん
ろれおりさ海さしますて かしくわんじさ（思と給の心ゐとし）（夫婦の言之）
まんどかろくとこうぢて はくそしきいとあそ
まゝうさそてとよの人はゐぞておやさらさゝと（細 拍のけの言之）
どり所ろそいもそこてらのとしびのこてろざ（細 所語らば舍比ま去すら）
しとえつり給いざとも云ろうれいひとむひろ
まくむすんひとハ今ゆぞても立と争らべく（孟 少方え拍のけそれハさもおくハあれとも）
やハあらうり悋さうしてくハどそもうくて
ともいさどしくんとさしまんハゆのじしとたらり（ゆんさうねんまし）

何ぶく呵まうなの事まえ
しかくうろまふゝもわれ
細 夫婦の心此今文ならうそ
もあらくゞ貴未うられま
てるとく少方ハ多さのかへらも
されども文のうくええろ
くし
いとどひかく去ききる母と
於少方のおしきうすれ夫婦
よいふくえんとし

いとまうくあききくらうも
かよおやしうろうくし
ききまうへひのやうまかぎ

（此段は男子二人と桂程の姉弟とあり）
ゆきろうさんぐことりやうよりそうす給へん
とゆまんとじうらひきうつ みのまさうつら（於姉弟のここのそひし）
とぞ給まおてもゆうれなれども心ざくへの教よ（桂の程の言此るし）
ありしきまくゐぶうちすずしるすうござとしので
ひつまうくすまれども母いめんし給べくを（細 夫婦の少方の言之）
わしそでみまうらで 何ようこてろの いま（孟 少方ハ又兄母少方のいさめすふ詞之）
らじめくろうり給ふもわしそど とし此云ひ（あらうきそひら）
うれ給ふ海少まうろうても久去く妙ぬる（れまりえしく少なしとく）
といづくをみゆりひろぞらぐさおりとうま
さんぱいじひがく去くさ 々々のこゝそえ（イみまゆきかつく）（御のけのるし）
えそそて給かめとしいさめり給くしうりあう（細 文母のいさめまらく 苦まる徳之）
いとけうくしきらうりしとくべるうれ此母（細 夫婦の詞之）（孟 子徳之）

げにそしともて　し首尾之
今はさばかりにては
細 今ちと堪忍ありてまち
のこと　も時節を見て
大将のとかくさうらふねや
うは浜見しをかひて人
よそことひらせて進退
と定めありべきなりとえ
おあもら引さうらふを
いひ出ひておあるへ私也
とつけて見てへる思え
くいふる大将の分別之

こしをつまじきんつくも侍れど、このどうる
とゝおりれらんのとこりと、あゝせんてを（細 人の法師ありしこと）
やうらこるし今はさばかりは侍らん
じゆるして、つきさら恥あるら世人にもこし（孟 世人にも我ぢからに合せてと舞の詞）
りうきてこそそうとりくるい給ちめ
あじらうてもつらひて かつそひめえんすご（孟 其程へし）
よろすらんと中のしまへれどいづれも（大将のこ）
らさあしるそ地よし見達十ちさい歳よし（花 姫子前中納言とのるに　孟 云重服上）
給いとら川くしひとよ私めくれてうち
あじらういあらねど、いとらうくしう
りのうらんへやうくきつきまくらうつきの見えん（花 姫は上大夫奔どらへ）
やけだらりそいてらうしくしげよ。ひめぎみ

ひなさくあるはゆかしされば
まふりばかよ見しきなう
さくあるとく
風がろてこなくひ
私アムの隠れ詞之 孟 武君
文の大将子私對面之
見とらうとらさ使ども
師大将の大事迄へお給
とうろ見てらの見えて
て給く

かくと物がくされば、かきなるそてつかくとこ
それ見しくさはうてそかぞ、ころくりられるど。（細 式アつゝ見る對面ごぎ中）
こゝろえきそしくさひ給、見あよ花氣色
給いうるをあへど、風をこうくくあうひ給ぞ（言給ひ）
とかくとあれいたうしるすくていそそまぬさ（大将のこ）
のなくさらそせ、車よのをてくきうひおかつぞ。（男見達と同車してたち大将のかりまして）
六条殿かはえみるくおちそねゞとのよ（むかしへ男見達とえつれおかつゝ　大将の詞）
とじめくあすよてよあれぞそしんみもこ（ひけ見の袁に）
こぶんやまきろくしのさまふらるがめて。（子息）
いとんかそげよことうらうさ向るゞとし、（ひけ見のへ）
いと哀なるよ物をひくてつゝあうくらすれ（細 むかしこ）
ど、母宮の御さらへひあうてめぐ[illegible]

そしさまり(ハ)ぬしとゝけぢかうと 細わかん まもらしきすくりて追ゐひしよくしつけてを給ハ善法とあることく

よろづにつけて海と思ふこゝろみちみちと
らよろしくてしら川とあづさあ給。おさうえ 辛のあはれのかうしく
てもちられしもとちしするかりしまかうし
つけざりけるを。ゑやかはいてうしうめぐ海し。 此の比の紹梅の心し
がうさげゝ給。𛀙のくへもゆゑすそ。家よきん 細 紫上を 紫上も此うちを
うしうしうつ。かくよろうかうくろし況しく 此給ふとて此方の心恨るかとみえし
うげさのふ。なさ忠ぐの事。いとゞかしと見え 孟 源へ
こし。ころさしかり。そのか。んひとゝり。きを 源氏へ 細 紫上のうへとも 細 東へ又行るれて
あくぬ人のゆからま。くちふもこゝろとさ 吟 泉源氏へも
ころと海に見えつゝ。よつ。夢つのうやみす やりのあはれ人すれいとし 孟 家を思ひすみれとも思ひ
とも。ぐ給と夢しきさ。いへど。ゐひやりふ
うかつもろ人へして。さうわきてしめ恨しうけ 孟 源の猶思ふよりぬるかとし

とりうへしくへの中らひハ
細 女ゑるすきさるすいつひまハ
うられすきことしし師也
ぐうしとあねよおかかし
源のわざまあうぎざを由を
宮も此御めすへハ式アリて
給よハらくむかうくれうかへ
それハ法の罪となりつべくもあ
りしと業之源の御く
この給り給ひへきと 細 内給
のち。このまうこひやにハ系
つまうふぐでさるし 孟 尚侍
の御うへとしうちとじ見え
られしとく

比かゝるけ人とこのもとろ人ハ
お尚侍ハ織よりもあかう
是下の妻〈家ノ主君〉家なる例也
とし 細 尚侍〈摩古〉磨古女太大臣
〈ヒキョリノ〉宮殿宮 尚侍淑子〈ヨシコ〉中納言
長良女太大臣ハ〈宗家〉

給へさるりかとのづらし人のかうしひハ志の
がうしくとへどうくれさしこ物すれハ志うらふ
べきつくもありまるんと給しのさしまうかう 此
うしぐりのさりきよひんのうさのれてれ。 弟の此の侍従ふうかなと
いよいくれまうさとふおいひてあハりとひ
すうひやして。この給り給りんとまし
しもしえられくさ海しげうそしつうとう 細 事れ有り
ちらみもまあくんおうさ海よかうしめしんぐ 源や内
をいがれて家。あしん。此やけ人ぐさこのとさ 大臣もと
あひしいまくやくもおうとといふへしこうしう 細 源氏八の字さ
つりてまいつせむう給。れいしくうつうあり あを給へし
それハやかくその頃するぐうしさいてもいあ 是 孟 此の入内の字衣と

承香殿のひんがしおもて　細 紫宸殿の後に仁寿殿ありそのうしろにあり承香殿
し弘徽殿ハ朱雀院の母后の御局也
西の宮の女御ハ式部卿宮の御むすめ
の妹の女御也
ころ〳〵弘徽殿　細 内大臣の女御
の母上也
佐京もりしを奏して主上ハあらんまでも女
房の装束をうつして退
出すべきか
やがてくらまぎれにまゐり
けるなり。西宮記
しるし

めしう二なくてまゐり給ふかた〴〵のおとゞ〈細 源内大臣也〉
このたいしやうの御いきほひさへさしあひ宰相中将〈細 夕霧也〉
ねんごろに心しらひきこえ給ふこのかみの君達も〈細 柏木なとの事也〉
とかゝるをりにとつどひ追従しよりて
かしづき給ふさまいとめでたし承香殿〈せうきやうでん〉の
ひんがし面に御局したり西に宮の女御は〈細 冷泉院の女御式部卿の御女也〉
おはしければめだう〈馬道〉ばかりのへだてなるに
御心のうちははるかにへだゝりけんかし御かた〴〵
いづれとなくいどみかはし給ひて内
わたり心にくゝおかしきころほひなり
ことにみだりがはしきかういたちあまたもさぶ
らひ給はず中宮弘徽殿の女御この宮

宮の内ハ　細 むかし〳〵ハ只今のつぎておかしきころ
いりみだれども中にさうらうれば乱がはしき
これみだりがはしき
さしあたる人のかゝることもあるべし
中宮弘徽殿　細 中宮ハ秋好弘徽殿ハ内大臣の
め承香殿の御かたに住ける女御也
左の大殿　細 鬚黒の北の方の時
いまだ左大臣になし
中納言宰相のむすめ
作者もまゐりつどひよつて
人ことに心をかへて内裏へ
まゐりてかうしきころ
がひそづつをはかる
をうつし
主上の女御　細 朱雀院
の女御　承香殿の妹君
の母也
細 主上の女御
いまだとくおまゐりませ
ども母女御ハ承香殿
のやうにありし　花鳥

の女御左の大殿の女御などさぶらひ給ふさ〈細 南代ハ天祿の頃より中宮女御などさぶらひ給ふさぶらひしとうつりてもありけるより 細 中宮ハ秋好弘徽殿ハ内大臣のむすめ式部卿の女御ハ式部卿の御女也〉
ては中納言宰相の御むすめふたりばかりぞ〈細 式部卿人ハ承香殿二不載也〉
さぶらひ給ひけるたうか〈踏歌〉はかた〴〵にさと人〈作者女房も相つらねて私人を拾てまゐりつどふて〉
まゐりさまことにけににぎはゝしき見物なれ
ばたれも〳〵きよらをつくしてそでぐち
のかさなりこちたくめでたくとゝのへ給ふ〈承香殿のいとこ〉
春宮〈とうぐう〉の女御もいとはなやかにもてなし給ひて宮は〈承香殿の女御〉
まだわかくおはしませどすべていといまめかし〈孟 主上也　秋好〉
御前中宮の御かた朱雀院とにまゐりて〈踏歌のめぐり〉

之りまいりて大臣の御方
所懸念じわびて御内
裏へまいりて、大臣の御かた
さぶらふハ大臣の女御の方
よりのそうしや

八郎君ハむつまじくひたち　孟内大臣の八男。蘭書集の秘事に覚悟をまなびしこと、母北の方よりおかし

太郎君の大郎君　細おなじ
十ばかりまで殿上せし
おかし　孟無冊式

てゝ東のかたよりみれバ、大みやの御かたハ　孟男踏哥也
八郎君としころ(?)ふかきまじハり(?)権流しうくり
まいりて、大臣のかたへハうぐひす(?)の御はじめ
東の御方ハ月のころとおなじ乱れけるよりハ
うし思いふかれて(?)うきこそハ(?)ひとつぎ河に(?)　お踏哥よりふ曲く行の
りろ(?)給ふにそれいづれの大殿の君達ハ宮の御へ
まいり殿上人の中に声よくれがそらにも
げにそおもしろきつ(?)いとめでたしわか
いかに八郎君ハむつかしひげにいとど　細南殿にて(?)　異南時家よりあり(?)平盛の
しつき給がいとうつくして大殿の女
御君としたまひてひさうどんのまへこと　細何もなし
人しらずハいかにめでたからん

うちまじりひきつれてあつまれるうちくらうさし
あかうの袖ぐち、大ぐちのけしきひはなやかなり　むかしの御方に
うちまじりの父おもひかけさせられたりけりの
まらうとよろこばれやう(?)にさうらふ(?)も女
房たちもやうやう(?)れいのうたうたをとりてあそぶ　女房たちも
しハもうじいとさまざましとせあやしかりけるなど
ござ　緑の綿之
そこさらげにいとめでたきことのさまにいふ
おほひとよくらくたちまちまれいますこぶるこ　おほかたの
えりかはひまやうちそれどけしきひとつさま　細大将の君をいふ
あへなうしてくだいとしてぐさりわかて　方水驛也
あまたせとのこまかしうさ御ことよりの　江饗
そこありてゐるん大将殿をまかせたまへりけると　給ひけむ

をがしハちどひ　細おなじ
もまうけしかた公
任内侍しそまへいる
とねがつかしうてとし
まへもいとらうしわう
ちふし給ふて　師おなじ
の方よりそのけ給ふこの
こ方とうろのまこと
まうらうしきこも
これハおもむきやうまうら
れど　師おなじそのまへ
水驛ろうべきをや、從大
ねハ飯驛のよし花鳥
よみ句　哭　同書給のことを
もへとうや、蔭男踏哥
推奈の名をもちひならど

名とうの抱給ハこらくうそ先例ミせまりしもそ光谷あるやうに書とせり尚侍のつゝ入もちとせあり て披言和さへにへきう郁事つあらんや 吾紀 よりのあるまひて 弄 つゝ系内の都よいふよう がりて 舞 黒も擎第家 扇あまよ作つるしく うつあるでよ 弄り らん おむるぐう舞 黒をきこひ 給ゆ人よ此すう内侍まで ありうさんのでそこをそ おりうくそふんし ふありうくしさつどかも まく退出しるこで遊宴 内されば帝のさもしれ ひとそかじ作ひきそ思い とまおて退出あれど 源の作せられしとんそ やし 弄 さるりきこえし抱をを

細大輔の返事也
のゐるつまるまて。目ひらひらくうく
し給ふしべらさてさせ給りらん
大輔の御返し 孟 とて夜退出あれとし
うらつりぐみと出かりしらしんれたまつ
久うんやもうらぬとのさ出みじくとを
細 宮のへ入給ふ
光やのしまへじは居りあすそ一つぬ人ぐ
細 かゝりける
ぞ御きのこあさくさ(?)ほどあそぐく
弄 源氏にて
まれくのはまりるれいはころゆうを給
むろりゆうされありてとすそてこをまへと
源氏君の宣しとと
きうてさを給しうば。こしひいあすりを
御達之御ござく退出ハいつよと
がくまうやし嘆のしそろと。いつしくしとせ
細 大輔の心
ひくさうりよ咲のて。かし抱とさくとくるよるあ
ぬせられとしらるげさねまかり。然戸の
弄 薫之

大ねそつさうのあざくし
陰西宮城云。左大将ハ宣陽門ニ在
宣陽門内廊ニ右大将ハ陰明門ニ在
陰明門内廊ニ
をれよりとそ 細 大輔乃
方ようりと思ひてみ給
かし 嘆 命婦の言の宿を
を大ねの方ようりとそつ
かうすし
三ゐ本よ 細 文字八大
ねと云。大ねよ源そまし
ま よとし 嘆 大将の宿
あつるる所をも山本と
うあるまゝ孟 大ねくれうえ
しいふ所もえねとし。又さく
いみどまもおすく〜
えんづる声を 細 百ちる
えんづる美ハ抱毎よある
きまれども我そかり
めぐりつる内にて大輔のとうひるう
ぞよこし 黒 弄 はまじとふかりつ

こやしかのわさびよきこひますて。まはこ
弄 端方の段意つや
こゝろすこのつきのあたりをひかえやしれ
細 宮の文を舞をみし
まへしかしわかりてこゝくまうて大ねは
大ねの主房のゝかし
つゝきのれざるしりこそかつりろされゆり
まそもしつれされば。まふぐくよこ給
孟 言 宮の
係山まよそゑうちつわうとらのさき
すくねてき美みもあるかいさえづるてむこと
そくとかめられてくるんとありいてむとも
宮の心
てありえて。嘆のしへとさるてともひねまへるよ
冷泉院
とふはうつくを給。月のあくさまよれりちい
孟 源よ源させ給へし
かやうすくさうかえて。さびの地とぐの清

めのとうち孟前によきとありしかり紙そふりゆくと遂懐之 暁円
く人済しせ 細 出ぬれやもすをお惟しまするかへ済しせりへる人書き海面白し 暁 向生
上荷結の居をもつおのり思ひうる我 や又劍ありて、若いづれの流行人へを新幸
有らハ肉しの叙く公卿殿上人女房るよしれともさうるらく今の世ふもきけるゆの
つがるのへ流まりまさく 細 みのと源
の流んだく
く源ハ西八歌のごとく
かし結ひ、極似げるとき
るすと云ひし、孟又と
云つよむかしきうすの
あふれとふとく
つとるかしけるよ 細 文仕
まか結そで引しまず太
ねるまるすびきまふるすを
根の結をとらまし
まんこびるがゞる 暁 羽衣
結三位し結るすく、此の奇
まうえ

けらひはふゞる兩るくおりしましもかりの人八
みもおりしましゅうしこうてそまとの結ひ浸流
んずく人わさうとぬをとふうて袖ぶひくらく
あ上上へ交仕も云ふうるすハ幸をこそ勤ろうてん申之
まもどうれハなぞしりハさしせを海
りんいとるくイしけるよ云ひしこのうらひさ
花 親乃やらぐるー親ん之 孟 玉のたへ
ぶ限をの居つするよ始りくとうんさうてそ
細 新宮之
笑くまやうがをりそてうてれいりてくとこさ
とく結りのむでおもや云うかゝつるをさとるこ
細 玉かうつ三位よ叙ゐらるすあり
れ、まらこびるどもとうとうりすみてへんとゐ
すあらど、そくいれ結りぬ、く海よのくもあ

うらはくせ 細 玉かうつの
らせとまらおぬ結みくせ
しるのあうしを流るる
どをもりされぶりし、らあり
へし只今を聞きすと
るくそてら 細 玉さ暁
まとくいそんへてあるう、業
ハ吹をも合もなう袖く下ゐ
え三位よ叙しのふをみえ、
師業ハ三位の人が是ゆう
るとえそのひあのびくまと
ハ業よハかくとかくもせそ
そむまづくおふとろはよ
そひるまて袖を住命のや
せうまぬせずまし 玉 業を
そのらぬそこよおかしこや
これ
きつらの 細 出かうの流をま
子池よさえ
いろうらんさともきらぬ
細 玄之の学をすくて皐
ぎきのをくし暁 三位のを
いとしあり師をやうたいれん
ずしのかうるきと給ひる

はからはくせるろうとの結ををて
孟 法親王之
あぞもちりくるひあのびくさ業とかよふ
細 房法三位之暁 主上の御旬と引寄之連
うらひそめかん。やくぬとろうのどこを守やとと
主上の御う卸ゞ
ゆれぞまらすとさ、いとおとくえるるをよく
玉のたへ
づりさど、ふゞひさ海つる面やハ手りと云ふ
ぐさめくく暁しまかぶ笑づくへのらくまるく
てこらし かおうなう 結しまるらめや
玉
いろうくんみでもえらぬ業とこうらし
てしそひとつへそめられ、今とらうんさる、やおへ
あかべさしと、きうくおへ、ぶら云ふこそてそのいま
おきや 細 新宮之
ずりそめ結りんくして、ひるうへいふとるれう
細 出うをすあ付まとせ遠くれをと
まふづさいひとあくへいとうらきら海わりく

ちひろさるゝしとみがあきらく
今ありうん　細 両段ことに辰とする心を申べくれとく
むろしきせのくさ　お むろ
うさハ帝も源氏と謂
し拙されどもくまむろ
らのせうれ

細 退出のるゝを急ぎ

るんとゝいてゝう根さを猶はたそしきのかゝあや　孟 門の根こ[illegible]
うるまゞつゝくれど、いとゝそもあゝ
あとかがくく、おうしこさ俺とも　孟 [illegible]
らじむつしき世のくと成ぞうと[illegible]
じゝうてきつゝひいすへ、いえがにも　帝の[illegible]
きじれしともうらいてさうと猶[illegible]
てそいめあすれめと笑[illegible]　孟 帝の[illegible]
らをまへるとこてあて いとじ[illegible]
まいひそこさ[illegible]猶えづ[illegible]
きこしを出来ぬぐつさ[illegible]
まえのじめ猶つゞで[illegible]

ろうしとうけつきてゝ
細 此人殺よ 我身も[illegible]
まよらひてそとくく[illegible]
くぬるも出来ゆべき
とおつゝのらしたる
ちゝむじるかゝうらく
さかりゝ　お 内大臣[illegible]
申合せて退出すべき
さゝこゝわつるし

ゆうしのらんじが
細 ゆゑへてをとくめまゝ
ぢきぬきしてうう芋[illegible]
文が前源海よみ[illegible]
河海撰[illegible]大納言[illegible]
弘徽殿[illegible]
平貞文[illegible]
[illegible]

つきびくあきこしつけどもと一ゝう出さくら
かゝじおとりとくそんくらあて[illegible]
まゆうされのひゝろ、さしゝ[illegible]
とゝりしゝそぬ人あかいて[illegible]
それ人ありぞあかゝ[illegible]
とられてくさうち[illegible]
よぐくあしをひきなつべきなちるん
するしてよいとはあしと笑[illegible]
しうらしめしあるよもとまち
まちうとらじめうさうれさうゝ[illegible]
まそぞみもいらんし[illegible]
ていとわそゝあのとてゆかさうれどひさこう

まちふ我ハまれくの男袍て
我ハまれと　二むらくの
ふし 師 祇をそ物をあく
とく 我 貞丈か云れせり
よ妾のちからんよおくう
御て我かまれしおかふと又
るうや
あもぐう御 師 車東とゆ
みされ治とみてくら尚
侍も出入毎よ蓋を絶せ
まつる西宮記を引て法
海よあり
こうひしきちうき海あり
細 道済の大切とよろ西向き
書ざ御之 孟 手来とふ
地ハ天子の北ちうまれ凡
名うの时ハむつうしきとを
九重に 細 是て退出あり
て八雲上ハさらくに出ふ
べきしあり 孟 重後つぐそ

よわるうるよおうとまれしとそ、つらし 聴し
うらん、あらさ海よのさかひ来て、かん
けのふ ちけんこと孟むの序あつく もくらじけるう、我ハまれと出ふかの
としえぐて、仍しまづる御しもそてるすら 細 源内大臣の八道し
衣くのほうしづきんともんりしすゞり、夫路 のけ里
をいと地むつしう主そひさうさうふさよ
で、え かむろく退出の时よまで帝還幸ありとし むらしまれそうれぞ、くうりてもそへ出
さらくきまりうてそむつうしれとふくま
を給 孟 御製
九重よ霞へだてゝ梅のむさくよそくるを
孟 紫式部判し
自ひうじとやらしろうさ 此歌是ハさるそもうけ こしそうれとも
れとくるり
此わりさ御ゆえハどこかう頭ハかくしく

つかやうえきびしくまのりてかえられかどの糸问もたつまじきうくくうつうりハうくなく
所さうり、音をとそへとり
男とまうりて
白 武 是の地よすきれつかゞ
ふとうし我ぞ耻とうし
こ一夜何よ名り
おもひべうあらん人も男とる
こそふるしう
師 右相めんとおひやりそ
ほんらうしきこそなり男
とつくそハまさみ道の縁之
いうぞうつぶゆべきとく 細 今
行末ハいうらう没よそ済
こ、ふしまへとぞそしむ
しめとく
うづうハ むろつの奇之。
香いらう、さもとうよう
をれそそうひそと云う
ふし 師 下の句早下仕之
よてハゆうさんを 孟 易そ
源へ常陸あつくべくとまうふ
すじ死とゆうりて儀なり
かやきしてとせ兵のりそ
むかしと出ま次お郁の亭

三 まし内道し 師 明之一夜八言と田うとふ
やわりりん、我をとうろうしこわりい川べきう衣せ
しきとく
細 名ありうをもてらるうとし
おもひべうあらひとも男とつえそこゝろづぶ
しうるん、いうてりきうてまへきて、出づしろや
三 むろくのそて
ひとひとりくるじけ、しとうそてまう
む うづりハ風するつてよ親のえよ云すふ
おむろくの世にん帝ありあつくきむさとし
べき自ひをすくとも、さうすうまうけうれぬけ
もひよ、家と出づしつ、くりとうら云うく 孟 大将の亭し 出勢
まうしきのね、やうくと夜の霰ふとえし
とうらうしまりんとし
まうけうちとうむてハゆうらうれめのまじくさ
よもう、りうしらし恋そでよいりよいそ
此えづうそうきまし哀 孟白
さうり風のうやましきぶくろやとこふ

へまうしあつへし おか同義
しくせとし織あたへとさうしき
あさやうかや おか織ま
花式もろきを又内大
臣八年さうあく勢とえ

りしますしたてしハとのゝね
所不進退 細孟同
おそろいそんさふとらふ
やさしまし心へし源の御
ふとるゝおふ前父せとく
のまし(に)はかうぬと文
これハともけうりとし
まうきハおかん 公家も
くれ舞のしんおふを
わかうくせかせでもなどの
いふものかりんとし

よからやもそと御心のすさびにまかせてかくすき
いとせかりうあすく御心んとも。おい
ないまそて。やゞくまうし御りのふ
織るらと。ふしきろやもうや
あるらよさそうりのことゝとつ
んま。人のうらみなおひそとのたまハ
くをりとよりあとくいもくぬ人の
あれハとそ思し給りう。六条御息所
つまくかいあしと思ひをど。まさ
ん。女も似やく御年のほとをはづかし
まししえさし。わすとりていき

まうかしく御との夕のさとの次や 細
わきまりてつきまうしと 孟
うゝくさすてふせらわらうと

ここそくけらのさましう
おまそのかわんてあそ
いひとへましよろ夜じ
そうらひうひぞもかし
あひうんとのまひ一へ
ことし

みちりぬ。みかりかはりて 孟 帝の入居させ給ふ事を大殿の服えて
ちじうらん。しらぬくさとゆも。
ノふかくまさらして。世
けれハりてすいよく気色
みとさしそしけうのあひしが。
わしろわれど。そてととつれも
あひねるハりしつきよ。月
しあふ二月すもあぬ。大殿
きけざなりやいとうくさに
もさそてゐかくれそうわくさ

ちらちらなりけるもなき
細 夜ふてまくみえく
わしらく方のみえきし

かくなくくれくなつよりくらぬかりあすくなれ
しらひゐられすふもくとなつていふつのを
みえず ぬることなれどけがあすりそうらく
かまでそ人やりすくぬ 柄ハどふぞそらり
と申さか 両親してさてさすの申ち
しやりよけうつりなりけをとなる人よそひ
わたらんよあろうかさくなれことをまつ
すしらあいろて申がされてけんじ給えと
殊いうふりそいとのどやりるてりや
うのつれぐくをまぎつつして所よまくり
みそぐらひ給しさ画あるどのびいうじう
与しかれバけのこさまり給ふだらがりくれ

何ハ世らんことと
おそまは悲びてつれ
をまへおりまふ父の中け
そうぐらてハ身と
去を告て
くさられてのどけさ比の
細 さりそ源とバ世びぐふ
ぶさとく 孟 かうさうん
とハ源の我方をさしてを
けつまりくまハ手も仰かり
うし仰らんとく
ひすまあのびて見せされ
ぞ 孟 夜ねの画るまえ
さまりてし

いうてそをらんすぞ父
のまそぬ世やうそ
孟 実父すてまつれバ討
画りさんともの天ねし
とく

志のびくつつりてをとかけ何ハ世らんことをれ
源 悲てはあおぶしくをえつけ給ふぞいかうで
おんはへさせちうきもとらて給ふと
やそをそろくしぞとぞありけり
源 うさうれてのどけさ比の声画さうえ
父の詞と
人とつよ志のうや。つまじくなそくてもさ
らぬしうう世ひ仰くつこしや斗ふ給ふとい
細 そりや世ゆへうんとく
かくのさつ画くうらんるどあらひまうま志
イ人ま 不明
源の父とく
お あふくの許し
ハまも源を生らし
のびくそとをなまれバいふうさそて我んふも
わてつうさよ世ひ仰くれ 給せさ画と。
お 参ふくの
源の父まハゆそぐさき
まかまてひしや。いぞてごうてまんくうん立
どいえの給つぬ世やまそ。げまいてそうくん
画うんとあらまうてうくさつく
孟 源のんとけ給ふ
討画もあらんとあられる時ぞむつり

なかよし　無ら言らく心殺さ
はくこし河海よそしかり。
かきもなく當時のなく
師説の言よ三人とい
うよ思やとあれバにぞ
りきのぞそハおらんとこ。
ところとハ表名ヨ幸
なとつくる綱のやうく。
さるうそでハいそぞくよのふ
うしし見碎業抄　万葉に

しかし此氣色とどころづきなきといひて
えしるほどの人へ(細えさとし)おもしろくせ給ぬこ
とかれハ仏ひろくよ物がりしつゞられどおを
いかのたしさをかり、いかなりけんごとくあるん(孟内探術とえ氣からとし)(孟えを実名え志うきうし)
といふよところえがくくもひろかうへつきさ(むらりの源氏乃)
こゆりもそゞりしかれど物がつるすくやへ(えしりと)
とそうさかし
(お)なかかすか彩の雲に神ぬれてうきを
人をとあのぐさしかや、わどいろいろハげよこ(文の何し)
とろかつれしくもまさり侍るりおかし(班細致し河恭　尚書　礼　日本紀)
しといやしくりころしまてびきひら(源の君ゝるの)
文をと
ばかれ、むかしのひとのをしやうよ物がなりしさへ(細彩の雲ともあり云々　西白去る)

程かろころいけよことちろつれくも　師老よころろとのまんの絹よ文こころへてゐ
かくとハ勝ろろうしと
青の人の忘　細　勝月衆
かり、世のるもとひお
まうし、勝月衆も内伯
のりとなこうしも内伯こ
高世いりやうとし
うしあうの　う　細　是ハよ
あろろるこれバ是ハ構り
さきとう言り

今ハ住よる　細　自今以後
し向くすよりくを就る
べきこと

おもんなるも　ほし　おとさ
くべるもとへとおるとるの

をこざらそあるべしとつれるくりそうし
多へどひのよろ河ゝらしそうの昔のりんは忘(孟源の人と)
と。朱雀院の后乃きらよとらこお絡し(西紀と)
おりなどゆかしいづれどさしおうころこと(むろのうし)
するハよや。られいよろうとぞあられおろ。を
いろろ人と。ふかりやすろかまさわざなり(孟源の人よ宗ひやりよふ乃ろ日と)
うり。いまはあふつけそりんどもこうく
ましまげるさ忠のつま於やし。さまのすと(孟勢きうと)(細ぞひきみすし)
おそかしとさおすしてあ川らしうひさ(孟むろゝの琴引まへしと)(拙琴乏)
うりしまハしつまとてと思ひかられよふおつ(源の君ゆしうと)
まのおろへとすゞくとそ。あ藤ハあかりそ

けのやまひも八まんはかり
そのひともまうわかやうねつ
つましや　風俗上野寺
細　ぼうすうとまゐりしまうれ
嘗これあるべしふいは言を
引きられてもしえうるおび
逢つきんを会わるれ素に
又後漢杜詩傳ニ將帥
和睦士卒鳧藻注言
觀悦如鳧戲於水藻ニ
よりてげんろうべきり
或おぼえの説ても漢書よ
鳧藻觀悦をいやうよ
引別ありとも鬼とよ
藻とのやうまちがひつ
いさんとこと
あらとしれひさ
細　一説てといのそとぞ云ふ
うきもこゝろわらをしれ
ひさいふ一説と逝去の
すとをき一説へさうとこと

とうでひたまひのつとて。こんまうとをて
らば。あかられもくすまひゞここれさ海かりて
帝よこゝ
らみも。ほのりは後しんち、しれくらめりさ
ゆゑをはらくらよりけすそおりてそれひとさ
いうしすがくさとゝ。おくげおまわうくるれど
はくとくさまねりてこそんかう。わさきあへを
お帝よりおゝのめとし
はかうくしのびくよおりみ身をうき
拗よおひたこもひくらやうのとそ。へおとくとも
を。おひあて荒しくれば。てろとけうり
いうへもそうし給ゆぞ。なさのおりぞこう
つましれんどきてとりこぐよつけてとい
しこまへつはしたてきわれきりけ

よふりて。古事の前の嶺やまふきのお
すわうさ久ぞんとをまふよつけてを見えろ
とも云
ひありてぬまあへつらし此とは海のくさ出り
出かられば。まの此まへのきうるをそくるる
こまにまりて此人をそれ行のまとて。
にぐとあうさくらまちりまひつと面白
細　山吹のかさ面白し
しかよ衣とるよしのくさまひて
源
出もずまわぞのある衣へぶうともいへ
でぞうふやまぶきの色がはまをしつな
どのまよをきく人あしうくさ手すぐよりるく
ちるれらうしは。いびぞ云へしれがけるよ
わやしきはころのすさひ如く

冬よ衣を　細　河海よ云
內大臣の青むすの文給ゐ
今よ思ふともこゝろよい
そゞ山吹の色に衣を源
てらそをさめ。源氏方の云
云ふかうよりとば山吹よ
ひとうりし河内佐口
すのをよ衣をそめしよ
をいそでらうよ物をこそ云
ぬりつもどにみぞの中居
孟源方こむろのかよへどう
るとめりし物おほうもそく
織よつかさらんとは云つき

ましとぞされどさらにいろんとくもあらねば山吹のちよつけくいふでこゝつとくに申た
とくあらくとの本し伝へくとあるくの折りからくうち山吹よいひしまくへらうよ
し所とよろえてくらう下喜
うやよろえつ　細布利よいかなるにも久ぞれハのべよ吟てふ無香のそかほとえつて三
られならくよ。或抄百首八〔ちりまそのぬへのかや花僧よそろへ侍くきよるか〇つとし此前ハ
秋の花こ。書田よ山吹よ川かへてそるに一首八物りしろて〳〵そこし侍れ
くらゐさりよりしころされもこと八　双紙有し。花ならくのさこよそるあれてたゝるし
さらくし。盃日師ならくの大事化よおかるせしわざと。そんぐらしとよるよ大名のたえへありして
やうく悔しく嘆しろうろくさと
りのまののてとやかりるに
墨業。前よ玉藻ハあら
まそし。ならくの事
とあらくらひきへる首
竜しや
あらずあるれそてありある
とこしくとさとあらも
あ。あちら洒落迄あると様
あらくへ伝への方くあうぬ沈
焼舎さらしと

浄のし　　　　　　　　　　　　侍る
のいしゆかりあろとなんへじてさむじうら
花るぞからよやうらるとけうぞしてるす
ど　ならしくと　盃源のみよよりかれゝそれえどうらくもぞめぐら
なるとも　鴨子と妻よ見まはからわてとし
まきり　のいへいあるたる人
あるど。曳しくすくよりまくて。所がつらるさ　細　浅の月
月ほどうらすかりぬるかな。ならずかうほと
てうしかりとうしくさそなるも。れんひ　京のならし
よ川よのとはかうめぐら吟行れハこし　まれらの名

ならつのべうがしでハ。對面のうらくんとさら
めしくあひしまかうるど。いかやめうきさき
すいさ
　侍　ゆうずぞまそえ
なろ人か子ばかつぶろくんなどくろくもよ
どころやまりうすんるどあかくとおあ名を　あまがら
そらすかひてらうらうくひて。女ハむかしのあ
やのれあうろかも。あらやまくこうらきう
きしむり給へんこと。つかぐるまくてあらんべ
そこしよおろしびかしてみるぞこの郡ごとの
あらくあひそるまでつらくそこじとハそすあ　盃ニ首のつゆゑとあるのふうとこ
とうぶやくまぶくしゝ吟まいふ満かくてうそろ

あやつれまてらの〈細ぞれうら方
るらうるろし栗よえかし
ぬすあとしうめう盃源の私
方よききそ同し菓子を
あひしうおかうまあれバ
いるろへのまよそぞ
るぞさし伝らひハ方の
ふのてんぶとの一つうぬ
らし
ありろうしもまど
おありうらそしもんの場
まつてんとなやまうき
とこけるる人のまたは
あららんとそらふめそ
そつの秋あらぞくまこつ
物そとくらやあしてらえ
女ハまくしの　細吉文さんの女
いさんあうさ物といえる
の実のかへらつくの方

かうり 師 源のうしろに立
よくとこいふきりにかすぐし 御
ろうびのてやらし 詩
云 君子有行遠 文母兄
弟すらはなれて 細りとしたる敎
とぐされて
みすて巣ぐされて主君
それぞしした殿のく孩
まうるハ敎ゆる子ねバ細と
よ源よ事してとまうす
をまことして云んで 嘆 まうす
よかざりとしてしまう云にて
てもへ入てりしまうくれ
てしまじあれともしかたなく
ねのおうろしよう。いて
むししまうらんハ源氏の
そかうこのまゝよまいて細く
よ源氏のれいうへとせうて也
なしまねなじかうしよかろ
よううね 細 源よりし
こまりうらんてをしきぐし
やしいふりすてて お源の文
よたんひとりくまのうくくりり

はえこうてしとしうさまうく此ぞいつされバま
細 大殿のおさまりて
ろうとてゑんとりけしともうぐるろうしや
孟 おまへ入りて大殿の奥へ行て
もぐれてうぐおひもおろくねうりのこと
いづうさまうはそうくそぐてさいらしうう
又の詞
ぬれ々しさまよ此ぐんくらそてさくしゆと
細 此文ほど女きまつてよんおかじしてし
いすまうどのむねのうくそくろのしぐしと
孟 源の詞
いひさうもしやきぐこまきざりつれがぐう
しうとそてまうしひまふんのくらよかうく
孟 お前を飾しまうし
らうじしうとひとよくしとめがとのと
武てのひとあかひけまのむれ少将と
とのか少将ハ月日へつでゝ力まゝよわさまじと
杓をたひしづてゝいてよく伊けよれさりよし
少将ハ大分さめりて仙まのまへて くくらはさし ありそ
綱太郎殿ハ此かりくのとかうくひあまでしと

ゆゆうつかしあのくわ殿のろく踏くしくりてるでとしのらえのれバまれいどうくらねはゐやうし
ところ。まおよおりてゑよ久ハりて大殿の此とらうぞりさんとて御在をのとりうすいたきさ
ずなしやとなり
いよくちけされて 孟 おの方れ御あれたまし
おへかうさひさうあそ

ええくこひととそまて
孟 桂姫を大殿の二階と世
みまそよ参しお前へと一向又
でまもぬく
このちぐうとよれもく
孟 父をとるへく仙を
桂姫の此しとらって

こうよれてえんでくうてぞ
まうくとも 孟 おのうく

をうしう業しやうそて左衛をバかうくぞ 細 それまでうをし お 杓のけのとよをの
らひしづきの人でゝえしもうけるうれ語つでゝ
おがくよろけうの由おやろひし 少将のて
まめやうううのさるそハゆみぐしとまて
うんりのうまいうろ。ひめ君をぞく色がうく
細 桂姫の見て
こひてさしまてゝ。すこて主をなり語つでゝ
細 桂姫のえて
いりいれうてろのうらよこかうて君をされを
くゆしゆううしくをしてゝつよくへつぞそ
まよしのもまうれバこころかぞくうれし
おまへよまし二人と当桂姫の身と
きよ此とく君ぐうらハつゆよまうするれ涙く
孟 男子生きハ勿一家ますて
んの意乃泊まて猛おうどをもうてのつうくくと

かひしらひまふく母君へ男
君くらの御なりのみこし
ともまぢ 俵相よ御事なるを

あやしうまくしまよ 抄 男子ハ
帝業平の源氏どもこれ
をなりて女よいひけの卿
大中臣 俵相なども
しそうられまうづしめ人よ
他とも
ことのよしの十一月よ 細 男子誕
生まり是八十一月の末つ
かれど先のひおでとく
しひ是秋之のみこ
息兼うの一説の有りむき
相あるよまうせり

よふれて并くらうてありろくとももらくく
あうしうみんし給ひあけられおりしこそと
とこのそてりのし給るどつまようやはし
うらやうてもやむうるふかやみみるは
らぶらうれんとあげさ給ひおやさうまく女
よつけつふんよまものとぞそうまうんの
ぞおつりろ、も年の十一月よいてわし
ちどとさくいづきつぐあればねもさふや
うまめでうしとりそしづきうふてと浪
しその御じの友信いいうぞともおひそり
ぶさうしぞうちくもとのづうくえ
みやうみの流もくとしゆりしうりりぐし

けふしよしふさこのよ 細 おろ
入弘徽殿ちずくれもとく
て侶ハごとろう

夫枝よくひわりて 細 今男
みとを給へるみさと夫仕
あうばまとともまうけ
あるべき他をそく

ゆかやけくしハ 細 内侍の事
まてさ織とどく里まそ
しぬそ
まうく給へるすぞ 細 内侍
のまくハろのすず亡くしや
中にまうくハさうるハも
あいせそし

しづきのみえらうふさきれけりくしらかじてとも
まり給ひぞ頭中ねとこのりんまえみをいくな
つうしさもくりくうそしびひゆるし給ひ物へ
きすかなの御氣色しらぬまぞつ夫つへよ
うひおりてぞりのし給へまし物をいごのりさ
とのうんうしさまつけても今まずくとく
らわかとせぬあげさきを歩うよいつくよあい
がくあしおしとあうりことぞそその給
ふゆわやけぶくいきつきさ御よさうまかひる
どしつく柔り給とくど〳〵やかくつくてやこ
ぬぐかりそぞありぬべきてしこうり〳〵
ゆうとやめのしられ出わい反の内むしこめ

さうりのくらせ
さやうよりこ御申しさ
人のらせうれバぬ又め
りしきとく

今いるまじらひさ
のれくきまそ人中よ出
まじらひそとし内府の剃
しまふこ孟近江京内
府の剃しまふともさ
るゝと

秋の久にてすゝぬよ
西東 諸於よ此巻ハ源氏
卅八巻十一月までのよし。
そしよ秋の夕としひ出う

八近江の表乃るすとのち
よろひ出ゝくきくちり
えく。彼一説の表よ志くさ
ぐり。彼十一月ハ源氏卅
七巻のるすよ此秋の夕
と出ゝしてまて又一年
をこくし。源氏卅八巻乃
秋と见るべし

始まるつよ但 孟夕霧ハ近実
へよろそひしれさるし
於始ろ再よるべ源結とい
書る の店のるすいおぐさを
云ひくるゝぞへん稚兄弟子

の岡侍のうくのぞうし京もさうりのくらを
うれど又めりしうさ源よかんさんをひて。
りてもづらひ給。女御もつみよあらしく
しきこし。この京ぞひさ出んこととさを
れバれむしめつりまへど。此ぐの今ハるのまよ
じらひそとせつしのまよどうよ啼うれ
ども。まじらひ出くしりのしますふいうれう
おりよりありきん殿ど人おやしこ始おくこし
たらうどらこの女いの女御よ表りて抱の
ねまどもくべゝすうしさほどのひるくらし
しらんさくてめぐふ秋の夕表ふどうするね
よ宰れ中ねをしらりかりして。倒るすしむどこ

られて抱うどのうかふかをに人ぐめぐらしかがり
て彼人らうとよりしめぐらよこのあふ
この表人てのうす給をよしふて出るさゝふ。
あれしそやこそしすぞとひさいすれど。ひと
さずれゞるはしくそてもあるされバぞう
らしくそておぶうさしくやの給ひ出んとし
つさうそくすよこのよよめるれぬよあへを
しもこれぞるくとめぐさてめくさは
ぐてもいともうし人でいとくるしとぞふ
めてさいしとさやうりそて
始まるひあるよるべ源結よるで そうでさ句
さしおゝんとまりそしへよ。よるてしまふる

れハ筆さしてよらんとし
くるのしをみる。　何刻のよろしくるのしお舟ことをみるのみじんにもや云ふともかなふべきおゝ
夕皃の花ゆ居をのとあるまゝりあふハあまろや我をたへものゝと

漕(こぎ)くろう。帆のかじ人をや。あれよろやとうつみぞ。
夕(ゆふ)がほやちるこの花ますがらゆうさ
こゝろしぬりのをとあひまくすまぢこのさ
くへなりをりとそ。おゝしらて
夕皃　しらべなきうどのさはらぬをしれべくもおもも
そぬかるる枕づゝひまどぞとそろしくるらん
めりとや

この夕皃まよひく　細夕皃
のんとし此女房の夕皃まハ
くく用ゆさ為すさく人とあ
まじきりのを。初ハ此要
るびしくまはえるすをむし
と旅しすみと
うへなさ　おゝよろべすくて
風のさうごくを舟人くゝ夕、
皃の我身のやるあるや、
風よさうごれてもちぞあ
くへいろくめとゝ　仲白
えしとるすうめりとや
おゝ草子此。夕皃のえしさ
まくのかふとらえらがり
ろー